

記 録

第三期小樽運河研究講座全7回

「どのように小樽運河の再生をすすめるか」

昭和56年5月16日～6月29日

小樽運河研究講座実行委員会

第3回 小樽運河研究講座のご案内

小樽は、港町として発展成長し、北海道開拓の歴史のなかで重要な役割を果たしてきました。山・川・海の豊かな自然を背景に、人々が歴史をとおして築いてきた町並みは、その栄光の時代を今に伝え、町に住むものの誇りとなっています。

しかし、一世紀におよぶ小樽繁栄の歴史をささえてきた諸条件にも近年大きな変化がみられ、さまざまな意味で、町の転換期を迎えています。小樽の新しいまちづくりに向けて、市民一人一人が知恵をだしあい、自立する町のすがたを真剣に考えなければならぬ時期にさしかかっているのです。

港町小樽を象徴する小樽運河——その保存、再生をめぐる問題も、このような時代を背景として、小樽の豊かな環境づくり、まちづくりという広い視野から検討すべきものです。運河問題に密接にかかわる経済・文化・交通・市民生活等々の複雑な問題を解決する手だても、その広い視野の中からしか決して生まれてはこないでしょう。

本講座は、そのような課題にこたえるために、各地で実践的なまちづくり運動をおこなっている住民や自治体の方々、さまざまな分野の専門家を招き、市民をまじえた総合的な学習、研究の場をつくりだすことをめざすものです。講師の方々との充実した討論をつうじて、小樽のまちづくりの課題や可能性がうきほりにされ、「運河学」ともいうべき、まちづくりの視点にたった運河問題解決の指針が生みだされるものと考えます。

3回目をむかえた今回は、前2回の成果をふまえ、「どのように小樽運河の再生をすすめるか」をテーマに、運河再生のより実践的な課題の検討を中心として討論をすすめていきたいと思っています。

多くの市民の方々の参加を期待します。

目 次

第1回 5月16日(土) にぎわいの広場の創造 1

— 保存と経済の調和をめざして —

浜野 安宏 (浜野商品研究所・代表取締役社長)

歴史的環境の保存・再生を考える場合、いかにして経済との調和をはかるかが大きな課題となっています。小樽運河もその例にもれません。

異人館のある神戸・北野地区の歴史的環境を舞台に、ユニークなアイデアでもってこの課題にこたえ、人々の活気であふれた、にぎわいのある広場をつくりだされてきた浜野氏をむかえ、実現までの経緯を語っていただき、歴史的環境の再生の道を探っていききたいと思います。

第2回 5月29日(金) 土地買い上げ運動の展開 15

— 知床の環境保護に学ぶ —

高橋 春雄 (斜里町助役)

貴重な自然や歴史的環境を守るには、時として人々が身を削ることも必要です。斜里町ではそれを実践に移し、「知床に夢を買いませうか」と全国に土地買い上げを呼びかけ、植林、保護によって美しい自然を取り戻そうとしています。斜里町の 高橋助役 をむかえ、運動の経緯を語っていただき、知床の実践的な環境保全に学ぶと同時に、小樽におけるトラスト運動の可能性を探っていききたいと思います。

第3回 6月2日(火) 町並み保存事業 29

— 事業化の手法をさぐる —

川端 直志 (Kプランナーズ・代表取締役)

町並み保存が、現在、まちづくりの中心的話題となってきているにもかかわ

らず、なかなか実現しないのは、事業化の手立てがまだ整備されていないことが原因の一つとしてあげられます。

討論者として、この問題にとりくまれている川端氏をむかえ、山積する事業化の課題をこえて、町並み保存のあたらしい事業手法の可能性を探っていききたいと思います。

第4回 6月12日(金) 歴史的建造物の保存・再生 43

— 制度的、技術的、経済的な課題をこえて —

広田 基彦 (北海道建築設計監理・取締役・技術相談役)

越野 武 (北海道大学助教授)

小島 一郎 (舞踏家)

佐々木興次郎 (喫茶叫児楼店主)

歴史的建造物の保存・再生を実践するには、法制度上の制約や保存技術上の難しさなど、多くの課題をこえなければなりません。その課題解決の道を、旧小樽新聞社社屋など、道開拓の村に移築された歴史的建造物の補修、構造補強等々、保存工事の設計を手がけられた広田氏、越野氏の体験談の中から探っていききたいと思います。

第5回 6月20日(土) 風景の創造 75

— 社会と文化の再建をめざして —

花崎 豊平 (評論家)

まちづくりを考える場合、実現に向けての実践活動はもちろん必要ですが、理論的な検討もたえずおこなっていく必要があります。

反公害運動に反対する運動をはじめとして、全国各地でおこっている反公害、反公害運動との連帯をもとめ、理論と実践とをむすびつけた活動をなさってほしい川崎氏をむかえ、「風景の創造 — 社会と文化の再建をめざして —」とい

るテーマで、広く河川開河についての考え方を語っていただきます。

第6回 6月25日(木) 地獄での試み 99

— 小樽を生きる場として —

浅原千代治 (ザ・グラススタジオ・イン・オタル)

佐々木謙二 (北海道現代作家)

佐渡美二夫 (同 上)

落 希一郎 (ジーガル・コーポレーション)

渡辺真一郎 (小樽青年版画協会)

まわりを海と山のゆたかな自然に囲まれ、町の中心部には歴史にちかわれた建物や町並みが残っている小樽。他のどこにもない、すぐれた環境をもつこの小樽を生きる場として、環境にふさわしい経済活動や文化活動を実践している若者がいます。彼らの目からみた小樽の良さ、そして、その良さを生かした将来のすがたについて、共に語り合いたいと思います。

第7回 6月29日(月) 総括討論会 109

前6回にわたる講演、討論をふまえ、運河再生の実践的、具体的な課題についてのより深い、建設的な議論の場として、多数の市民の自由な意見交換がおこなわれることを期待します。

第8回 小樽運河研究講座 を終えて 123

第1回 にぎわいのたぎりの創造

— 保存と経済の調和をめざして —

講師 渡野 安宏氏

昭和56年5月16日
小樽市労働会館

講師紹介が終わって、

— 僕は、釣リキチ少年にとりましては、釣リキチの神で、建築家にとっては建築プロデューサーで、宝石デザイナーにとっては、宝石デザインのプロデューサーで、カメラ業界にとっては新しいカメラを開発した人で、いろいろな事をやっております。

最近、力を入れているのは、地方都市の新しい経済基盤を作るための、産業再隆とか、市街地区や商店街の開発なんです。

で、私は、みんながやろうというやり方、あまり好まないうです。

日本は、自由主義社会なんですから、コンセンサスなんか、得られないんです。それを強いるとするから、日本全国、どこへ行っても商店街というところ、マーケードがかかっていて、壊滅がおり、ガス灯の懸明がなくなり、音楽が、かなくなりつつある。

結局、失敗も成功もせず、どっちにもつかない。それと、このまちで、何かを創出するは、

それでは町は変えられないんです。自分自身が命かけて何かをやり出すなければ、状況は良くなりません。

神戸の北野地区も、委員会とかではなく、金のない熱意だけはある若い人たちが、やり始めたんです。

僕は、神戸のファッション都市化に取り組んで来たわけなんです。

これから地方都市は、自立できるようなテーマ作り、産業を持たなければ、やっていけない。主体性を持たなければならぬ。

それじゃ、神戸には何かあるのか。ファッション産業が急速成長していた。広域的な意味での、ライフスタイル全体を豊しくしていくような産業が、沸き起こって来た。

それは何となく見覚えのあるところがある。

そこで、情報を集めて、20年ほど前、KEFA、市長と知り合って、結果的に、スタートラインの中にも、ファッション街が出来ることになった。

これは、

た。アパルターとして建てた
家々が、ほとんど崩壊寸前で
それに代わって、非常にゆげ
げばしいラブホテルとか、安
普請のマンションが、軒を連
ねていた。これじゃ、いかん
のではないか。

そこで、いろいろな人を集め
て、何とかしよう。で、一番
良く建物が残っている、山の
手通りという通りに目を付け
たわけです。

ラブホテルの隣りにあった
空き地を若者たちが買って、
フレッシュなムードの異人館
風のボキャブラリーを残した
ショップ「ブラザ」のような
ものが出来れば、ラブホテル
は、立ち退いてくれる。

立ち退くような要索を作っ
てしまえば良いわけです。与
軒あったラブホテルが、1軒
になりました。その1軒も、
回りが、ファミシヨナブルで
ステキなので、ネオンを変え
た。

ラブホテルでも、センスが
良くて、町並みに合っていれ
ば良いんです。必要ならなん
でも壊していいんです。

異人館風のリノベーション
の人は、早くもスウェーデン
の甲府。その住宅地作り
のショップ「ブラザ」が
出来た。

この町並みは、
町並みは、町並みは、

リノベーションが通りの建物が
出来た。

家を建て直すんだけど、ど
うしたら良いか、という事で
異人館風の建物が出来た。

昔からある異人館は、市に
よって買上げられた。

回りが段々、カッコ良くなる
んで、俺も、僕も、という
事で何軒が出来た。

非常に良い環境になり、地
元の人にも定着し、すごく良
い界隈が出来た。

この場合、一番良かったの
は、行政の対応です。二軒出
来た段階で、高度制限と用途
制限をかけた。

これは非常に素晴らしい。
民間が先動して、行政が対応
する。又んご脚ですね。

高度制限によって、安普請
のマンションはもう、建たな
いでですね。

用途制限によって風俗営業
は一番やれない。ラブホテル
は出来ない。

大卒の資本も進出出来ない。
結局、適当な大きさの地元
の人がやる。

非常に地味な、安心な商
売が、徐々に進んでいって
来ている。

この町並み、異人館風の
家々が、道を挟んで、
家が建ち始めました。

一番先、軒が出来るのは
ラブホテル、

この町並みは、
町並みは、町並みは、

地元の商店街が、あ
んなに高層ビルが流行るやりに
なると、見向きもしなかった所
で、若者たちが、色々やっ
てパーラインにある。

これは、神戸だから出来た
と思わないでほしい。

命がけでやる人間が、何人
かいれば、それが違えば、
協力者も集まって来ると思
うんです。

これから、文明有利の社
会から、文化有利の社会へ切
り換えて行く。狩猟型の発想
から耕作型の発想に、転換し
ていかなければならないと思
うんです。

ハンティング型の発想で行
くと、非常に短慮に物事を考
えがちになって、育つべきも
のが育たない。

町づくりには、黒川紀章先
生のような大先生の、目立つ
建物はなくて、いらぬわけ
です。

地図を広げて線を描くよう
な都市計画は、もう終わりな
んです。

これから、手でさわった
り、目で見極める型で、コッ
コッと町を耕殖していく時代
に、入ります。都市計画
神代時代だ。そうなります
です。

高層の立地も耕作できる
という事を免罪、述べました。
駄当園という言葉があります
が、そこだけ耕作できる
という町並みは、

町並みは、町並みは、
町並みは、町並みは、

町並みは、町並みは、
町並みは、町並みは、

デパートの食堂で毎日、飯
食って、そこが一番えーと思
う人はいないと思うんです。

そういう環境を、こさえる
のが、町の任務だと思
うんです。

都市に係わる人間の作法だ
と思うんです。

風景を壊してはいけな
いんです。自分の建物が、ど
ういう建物として存在する
か、という事を、いつも考え
なければいけません。

パブリックとプライベート
の中間にある、コモンスペ
ースを忘れてはいけません。
その認識がないから、変な
建物が建ったりするわけな
んです。

僕は、青山に、コロンファ
ーストという建物を建てまし
た。

新しい土地での住み方のモ
デルを、建物が発言したつ
もりなんです。

この町並みを茶系統とい
うことですが、新しい建
物を建てる人は、何のなん、
その町並みに合わせて、町並
みは、町並みは、

町並みは、町並みは、
町並みは、町並みは、

町並みは、町並みは、
町並みは、町並みは、

町並みは、町並みは、
町並みは、町並みは、

町並みは、町並みは、
町並みは、町並みは、

まどらぐエネのデザイン

— 山本 —

山本に話を聞くと、代官を
を提案して来たんだが、遼
河の部分に道路は必要ない
という事で、遼東を展開して
来たんだが、そこから、道路を
こういう尺に、という提案は
してないんだ。

それ、行政の方も、遼河講
座にいらして、岡並木先生の
居住できる空間としての道の
考え方を、聞いてご存知のほ
うなんでしょうか。

— 渡野氏 —

イメージとして、それはな
か。たんでしようね。

ポテンシャルを引き上げて
行く道路作りがあるんです。必
ずエネルギーの新しい形態は、地
の形を、暴くするんです。

日本の地理は、人々の
種の間から、新しい、可なり
りと戻りせいで、

自然環境は、

エネルギーは、

エネルギーは、

エネルギーは、

エネルギーは、

道路にしても、原野時代に
後を継ぐには、

まさに、狩猟型エネルギー
です。

ハンティングというのば、
沢山、人がいるから、店出さ
う。

そうじゃなくて、人を呼ぶ
には、どういう種も植えたら
いいか、というところから、
じゃわめやる。

エネルギーの問題にしてみ
ても、製作型エネルギーに
適応しなければあかん。その
代表選手は、太陽ですわ。こ
れ程、有効な、

エネルギーは、

エネルギーは、

エネルギーは、

エネルギーは、

エネルギーは、

エネルギーは、

エネルギーは、

回えるわけが、

道路にしても、

まあ、すぐ道路作りから、スピ
ード出す。それで、パトカー
が出て、ねずみ取りやる。ド
ライバーは、ねずみ取り防止
のレーダー付ける。

そんな事ばかり、やって
んですわ。

二つで、怒り切り換えて、
みんな、のんびりやったらえ
えんですわ。

ところが、ハンティング型
怒り、

僕が喜みたいのは、

道路は、

道路は、

道路は、

道路は、

道路は、

道路は、

道路は、

私が、

僕は、

で、

ついでに、

空気が出来てし
まった、

収まる、貯蓄は出来る、でも貯蓄が
す。
今では、道の建設、あるいは
リサイクルです。誰かが、地元
民になれれば良いわけですが、

— 下沢氏

守る会の方、案に一生懸命
運動をやっておられる。しか
し、埋められるものとして、埋め
られるものとして、落しても
良いんじゃないかと思うわけ
です。

それと、今の行政が、強引
にやった事が、いけなかった
と、市民全体にわかるような
事を徐々に押して行く。

小樽の人たち、あえて良
いとわかってるんですけど、
元に戻すべきだ、という意見も
そのうち、出てくると思う
んです。

そういう事でも、いろいろ
考えます。

— 沢野氏

1日、建設局の方、
環境局の方、いろいろと
話をした。

建設局の方、いろいろと
話をした。環境局の方、
いろいろと話をした。

建設局の方、いろいろと
話をした。環境局の方、
いろいろと話をした。

建設局の方、いろいろと
話をした。環境局の方、
いろいろと話をした。

— 沢野氏

建設局の方、いろいろと
話をした。環境局の方、
いろいろと話をした。

建設局の方、いろいろと
話をした。環境局の方、
いろいろと話をした。

— 沢野氏

建設局の方、いろいろと
話をした。環境局の方、
いろいろと話をした。

— 山口氏

建設局の方、いろいろと
話をした。環境局の方、
いろいろと話をした。

と言っておきながら、現実に
は、道は単純に単線というの
が、問題に昇格するんです。
2車線の道路ですが、山回り
バイパスとしての効用が出て
来るんです。

それともう1本、広域農道
としてある道路を、バイパス
的な効果を持たせて作る、
という計画も決定したわけ
です。

そういう、色々な新しい要
求が出て来る。

建設局の方、いろいろと
話をした。環境局の方、
いろいろと話をした。

ええんですわ。
地方自治体が、大きな閉塞
によって、潤って赤字を解消
するなんてのは、もう時代遅
れなんです。

陳腐な発想ですわ。
公営投資という名の下で、
意味のない砂防ダム、道路、
沢山あります。

たとえば、温泉地。ひなび
た温泉なんか、結構、税金納
めてる。納めてるんだから、
道路を立派にしよ、という事
で、道路作って、立派な建物
を建てる。すると、逆に人が
全然来なくなる。そういう事
が沢山あるんです。

結局は、住民、一人一人の
ライフスタイルの問題にかか
って来るんです。

自分たち、自分方の問題か
んです。

建設局の方、いろいろと
話をした。環境局の方、
いろいろと話をした。

建設局の方、いろいろと
話をした。環境局の方、
いろいろと話をした。

建設局の方、いろいろと
話をした。環境局の方、
いろいろと話をした。

建設局の方、いろいろと
話をした。環境局の方、
いろいろと話をした。

すかしいんです。

しかし、サーモンサンブチ
ンブリーというのぢやらないと、
自然保護にならないと思
うわけです。

それが飲めるのは、もう、
北通道ぐらゐにしが、ないと
思いますね。

そして、良い町並みを作る
という事は、自然を残すとい
う事と、関連していると思
うんです。

町並みを作ると行く、自然
を残すに行く、自然を残す
という事は、自然を残すとい
う事と、関連していると思
うんです。

バレーボールのマスター
フコ依、等、色々と関係が
ある。でも、関係がなくて、
自然を残すという事と、
自然を残すという事と、

自然を残すという事と、
自然を残すという事と、
自然を残すという事と、
自然を残すという事と、

として、どういう鉄道を残す
のが、そういうところ、残え
てほしいですね。

今日は、暗示というか、ヒ
ントだけ言ったわけですが、
それが、かたまったら、又、
同人誌として、呼んで頂けた
らと思います。

今日は、これで終わります。

第2回 土地買い上げ運動の展覧

—知床の環境保護に学ぶ—

講師 高橋 春雄氏

昭和56年5月29日
小樽市労働会館

講師紹介が終って、

—ただ今、紹介にあざかり
ました高橋でございます。

これから、与えられました
時間、我々釧路町が行なっ
ておりますところの知床100
年につきます、お話しを申
し上げたいと思っております。

先づ、我々が生活をして
いる知床は、いい所ではな
いかもしれませんが、思
い出の所、思い出の所、
思い出の所、思い出の所、

思い出の所、思い出の所、
思い出の所、思い出の所、
思い出の所、思い出の所、

で、釧路町方面に和人が入
ったという記録は、寛永12年
(1635)ですから、約346年前にす
でに和人が足跡を残している
という経過があるわけです。

これは、松前藩の家臣が知
床へ島を巡行し釧路に来た
と記録をされております。

寛政3年(1791)に釧路へ舟が
出た、とされておられます。

知床の和人が来た、と
いわれるのは、釧路とい
うものが河から流れて来た
ということ、道産産物はお
話された、といわれてお
る。

明治18年に戸長役所が
設けられた。

で、釧路町の歴史、
これは、別冊歴史
の中で扱って
おられます。

和人が来た、とい
うのは、
和人が来た、
といわれる。

和人が来た、とい
うのは、
和人が来た、
といわれる。

和人が来た、とい
うのは、
和人が来た、
といわれる。

小麦などを耕作をしているわけでごいませう。

漁業につきましては、知床半島の海岸線が100kmほどございまして、そこで定置網漁業をしているわけです。

まあ大体、年間240万尾の鯉がとれる。

鯉が主体になっておりますから、どうしてもこの養殖事業に力を入れなきゃならぬという事で、1年間にオホーツク沿岸で約1億2千万粒の卵を孵化して放流するわけですが、その80%を斜里町が担当しております。

4年か10年たりますと放流した鯉が生まれた川に放流してくる、この習性を利用して、産卵を促すのがこの目的でございます。

知床山から流れてくる川は、流れてくる川が、この川がございまして、この川から目をくらまして放流しております。

産卵の時期は、この川が流れてくる川が、この川から目をくらまして放流しております。

この川が流れてくる川が、この川から目をくらまして放流しております。

この川が流れてくる川が、この川から目をくらまして放流しております。

この川が流れてくる川が、この川から目をくらまして放流しております。

普通でありますけれども、斜里川には、ホクレンの精糖工場、或いは合理化製糖工場などの工場排水、或いは都市排水などが流れ込んでおりますけれども、それでもBODが高い時で18、通常12程度ですから、非常にきれいな川なわけです。

鯉が選上するためには、という事で、いきおい、自然というものを大事にしなければならぬ。

川を汚すという事は、魚々の生活を破壊させる、と考えるわけでは、まあ、力を入れているわけではございませう。

斜里町の話を聞くと、知床半島でございまして、大抵は国立公園でございまして、国立公園の指定が、この川が流れてくる川が、この川から目をくらまして放流しております。

知床半島に、30年ほど前から、この川が流れてくる川が、この川から目をくらまして放流しております。

この川が流れてくる川が、この川から目をくらまして放流しております。

この川が流れてくる川が、この川から目をくらまして放流しております。

で、次に、そうが、北海

道の指定はそんなに自然が保たれておらず、大抵は踏んでおられるので、評価をされたいわけではございませう。

36年頃から知床半島ブームが来る様になりました、政府も知床に注目していたわけです。

全国的な視野から、新しい国立公園を選定しようとなりまして、知床が候補地に入っていたわけです。

で、色々は何の運動も起さなかったのですが、国立公園に指定されたわけです。

この川が非常に珍しい、国立公園になり方が非常に珍しいという事は考えています。

知床で22番目の国立公園に指定しますが、当時はこれが最良といわれました。

知床、沖繩が復帰しまして、国立公園というのが出来たわけです。

この川がやりとりをして、知床の竹富町は姉妹提携をしております。

この川が、知床には尾白ワシという、尾の白いワシが非常に多くて、西表国立公園には冠ワシという種の白いワシがおるわけです。

で、まあ、頭と尾を結ぶ縁結び。

知床から西表までは丁度、3000km離れていますが、日本の最東北端の斜里町と、最西

端の竹富町、これと何かのご縁ではないかという事で、昭和48年に姉妹提携を結んでおります。

そんな経緯もあって、知床は国立公園になりました、今あの知床横断道路というものが新聞などでは、自然を破壊しているのではないが、と取沙汰されております。

何故あの知床横断道路をつくったかといいますが、昭和34年に知床半島をはさんで反対側の羅臼町と斜里町とで、ひとつ経済交流を円滑にしようという事になりました、経済交流をするにはどうして道路が必要なので、道路を開削して欲しい、と固に陳情をしたわけです。

38年にこれが認められまして、知床の地下資源、森林資源、それから両町の産業経済の交流を図る、と、まあ、まあ開削の目的を定めて着工されたわけです。

翌39年には国立公園になりましたのですが、当時環境問題については厳しくなっていたので、工事は大体頓頓に遠んで参りました。

昭和46年に国立公園行政が厚生省から環境庁に移ったとたん厳しくなったわけでごいませう。

従来は道路をつける場合、必要でない土砂は、ブルドーザーでどんどん谷底へ落とした。木は切り放し。

そういう事ですが、道路

森は比較的にある。けれど、知床半島から出れば、そういう事は一切ありません。いろいろな土砂は全部運搬して支障のない所へ捨てなさい。

木は最小限産しか切ってはならない。そんな事で、両町の道路があと6kmでドッキングする段階になりましたから9年、僅か6kmに9年かかっています。

昭和55年、去年の9月25日に、80億円という巨費を投じて完成したわけです。まあそういう経過でして、長い間あの道路の完成を待たされたわけです。

開通してみたら、僅か1ヶ月の間に20万人の人があの峠を動きました。

この峠とんどがマイカーから、1日に6千台から7千台の車が入ってくるという事で、至公亭にあって、あの目録見るとは違っていて、大変な後始末をしなければならないという危惧を抱いているわけです。

市幹部では交通渋滞が起きてますし、環境破壊、つまり高山植物の盗採とかの対策、それからゴミです。車から捨てられるゴミをどの様に捨てるかという事、あの道路造ったおかげで地元としては、大変な後始末をしなければならない、という事なんです。

知床半島、知床にそれとなく、これと、その様に、元々、自然環境という事になりますと、非常に大変な後始末であるという事になります。大変な後始末であるという事になります。

知床半島の自然生態系がそのまま保護されてる、というのに非常に珍しいわけです。非常に多くの原生の植物がある。

野生動物も然りです。特に、尾白ウシ、それからヒグマが多いようです。

北海道全体に棲息しているヒグマの数が知床におるんではないかといわれています。では北海道全体で、何頭のヒグマがいるかという事、ヒグマの調査をやって中々、それがわからない、という事なんです。

それにヒグマは多い。観光客がヒグマに遭ったという前報がたくさん入っています。

知床のヒグマは人にあまり近づいていないために、人間に襲いかかったという事は、まず今迄ないわけです。

然し、組合は猛獣ですからやはり、観光客には、ヒグマを見たら逃げなさい、と指導をしておるわけです。

が、どうも内地の人は、北海道のヒグマの恐ろしさを知らんやうで、靴か何かのつまみで踏んでしまっていくという事が

多いわけなんです。でも、それが、大切な事なんです。自然保護の対策というものが、行政の柱の一つになっていまして、従って、町村としては全国でも最初の自然保護条例を設けておるわけです。

この様に積極的な自然保護政策の中から、現在行なっているところの、知床100km運動というものが考え出されたわけなんです。

知床国立公園内の岩尾別地区という所をわけですが、何回か行った運動を行なわなければならなかったが、その経過を幸し上げてまいりたいと思っております。

戦後、日本の食糧事情というものは非常に悪かった。

戦争に敗けて、海外に行った日本人が皆、この四つの島に引揚げて来た。

それでなくて永い間、戦争をやっておったので食糧事情が悪かったわけですから、まず食糧事情が良くない。従って、どんな所でも農地にして、食糧の増産を図らなければならぬ、という時代だったわけです。

で、斜里町にも、大型の開拓パイロット計画が3ヶ所、あったわけです。

岩尾別地区にもそれという開拓計画が立てられて、

岩尾別の次、三股にも開拓計画を立てられた。ところが、この地区は前に開拓したことがあって、バツの悪かったことがあって、2度、3度、これが3度目の正直で成功するがと思ってましたら、これも失敗したわけです。

宮城県から60戸ほど入ったわけです。

当時の状況からしますと、原生木が生えておられます、それを切り倒して、根っ子を抜いて、それを燃やして、それから開墾をして、作物をまくという作業なわけです。

内地で2反か3反の水田をやった人に、5町歩からの土地を開墾せよといってもこれはビックリするわけで、開墾がなかなか進まない。

住宅はワラぶきですし、電気はない。道路もない。

水は川水を汲んで使う。食糧増産に来た筈の人が、食糧の配給を貰わなかったら生活できない。

そんな状態がずっと続いたわけです。

作物が出来ても、50km離れた斜里町まで持ってこなければ換金できない。

そんな事で、採算がとれない。

開墾せずに残った農家が20数戸ございましたが、昭和41年に斜里町が、斜里町に開墾を断って、全戸が移住したわけです。

昭和54年11月4日付

天声人語

昭和54年11月4日の天声人語が、国民の眼に一番とまったものです。全国からの応募がグーッと増えたわけですから、また、電話が鳴りっぱなしになった。遠い打ちをかけるように、

昭和54年11月4日付

天声人語

昭和54年11月4日の天声人語が、国民の眼に一番とまったものです。全国からの応募がグーッと増えたわけですから、また、電話が鳴りっぱなしになった。遠い打ちをかけるように、

昭和55年10月30日付

天声人語

昭和55年10月30日の天声人語が、国民の眼に一番とまったものです。全国からの応募がグーッと増えたわけですから、また、電話が鳴りっぱなしになった。遠い打ちをかけるように、

昭和55年10月30日付

天声人語

昭和55年10月30日の天声人語が、国民の眼に一番とまったものです。全国からの応募がグーッと増えたわけですから、また、電話が鳴りっぱなしになった。遠い打ちをかけるように、

三つは、町の中に人工の自然を築き出す。

三つは、町の中に人工の自然を築き出す。これはこの三つをスローガンにしているわけです。

で、今年ここに持って参りましたが、100名運動に参加された方にはこういう登録証書を差し上げております。100名を8千円で、何月何日と日付をいれて、これをひとつ、こう額に入れて飾って頂くと、心の地主、知床半島に土地を譲るとるんだよ、と何かは知らんけど100名の土地を譲るとるんだよ、という証書ですね。

それとこのバッジですね。100名のちょうど百両分の土地の大きさ、100名のバッジですが、これをつけて知床にいられた人は、パンフレットはただで貰えるし、旅館に泊まれば特別なサービスが受けられる、という事をごぞいませ。みなさん方の運河を守ることに参考になったかどうか分かりませんが、色々がやっております。知床100名運動の一端を申し上げて、何かの糧にでもなれば幸いです。どうぞお望みください。

10分間休憩の後

――北村氏
先づこの運動は、町の中に人工の自然を築き出す、という事から始まる。

町の中に人工の自然を築き出す、という事から始まる。これはこの三つをスローガンにしているわけです。

地を賜うたいというの、20年、30年先でいかなる買収も欲しいというのでは多分ないでしょう。全部を運動で買えない場合でも、その土地を買収するためのお金を自治体で用意できる可能性がバツクにあったのではないかと思うんです。

それが才一点で、もう一つは、実施にこぎつける迄には色々な手続が必要だと思っておりますが、どの位の期間を要するかと、そこでどんな事が検討課題とされてきたか、といった事をお話し願えればと思います。

――高橋氏
はい。この運動が成功するかしないかということ、ご質問ありましたように、非常に心配をいたしました。

場合によっては町の金で買上げしなくてはならん、という事は持つとったわけですね。

開拓者は、何年かかってもよろしいという話ではなく、即座に買上げてくれと、運動のほうは1千から百両の金が集まる迄に1年、2年、或いは3年かかるだろうという事、それから、資金の手配、それから、町の中に人工の自然を築き出す、という事から始まる。

の木の代金、合計3千両をいただきました。

町の一般財源からは、どこから町税でも同じだと思いたす、出せる筈がない、従ってこれは借金をしました。

北海道が地方公共団体の事業を振興するために、振興基金というのがあるわけです。

この振興基金というのは、土地を買うというのにはなかなか貸さないようになっていまして、しかしその取扱要項の中に「その他、知事が必要と認めた場合」には貸す事になってるんです。

で、たまたま知事が斜里町へ来たものから、知事知事が乗りに乗って「その他知事が必要だと認めた場合には出せるようになってるんだから、その他知事が必要だと認めて下さい」とお願いしましたら、よし判った、と。

で事業費の8割、4千両を借りて、残りの1千両は町で用意をして、契約をして即座に払ったという事ですね。

この4千両は五分五厘の利率で7年で返すわけですね。

もうこれで9千両百両集まりましたから返せる、だから返しますよと云ったら、繰り上げ償還は困ると、一辺に返して貰ったら困るといふ事ですね。

運動からお金は戻って来るけど返す先がない。

戻してくれたお金で、それで先づ説明するのを忘れたんで

すが、100名運動というものをやるんです。

で、7年以内の返済は町費で支払って行くことにしました。

お金はそういう用意をしたわけですね。

それから、実施する迄の期間ですね、これはそんなに長い期間ではないんです。

開拓者からの請願が議会に上ってきたの11月で、12月の議会で買うべきであると決論が出た。

議会が採決したら理事者は忠実にそれを守らなければならんという義務があります。

それから予算編成をして新聞記者発表が翌年2月ですから、まったく短い期間でこうした事を決定したわけですね。

で、こういうものは長く検討するの結構ですが、検討という言葉は前向きも後ろ向きもあります。

役人が非常に良く使う言葉なんです、検討という言葉は。

やらないのも検討、やるのも検討と。

あまり期間をおきますとこれはやらない事になったかも知れません。

――北村氏

例えば知床の番屋とか漁具とかを民族資料として保存していく事、或いは小樽運河の運動のように、町並みを守っていくというような事に關してはどう考えていらっしゃる

がなるんです。

「う、この人はその土地のものを……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

作費をしないので堤防とくと木が育たないという問題があるんです。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

水質汚染の深刻さを示している。
 公害問題の解決には、行政の末端まで、
 かなり行き渡らなくてはならない。
 公害問題の解決には、行政の末端まで、
 かなり行き渡らなくてはならない。

公害問題の解決には、行政の末端まで、
 かなり行き渡らなくてはならない。
 公害問題の解決には、行政の末端まで、
 かなり行き渡らなくてはならない。

公害問題の解決には、行政の末端まで、
 かなり行き渡らなくてはならない。
 公害問題の解決には、行政の末端まで、
 かなり行き渡らなくてはならない。

公害問題の解決には、行政の末端まで、
 かなり行き渡らなくてはならない。
 公害問題の解決には、行政の末端まで、
 かなり行き渡らなくてはならない。

「小樽の歴史をどうするか、
倉庫をどうするか、
歴史をどうやって、
どうするか。」

——北村

小樽の問題をどういう風
に扱っているか。專業制度
や手法にからめてでも結構
です。政治的な側面を含めて
でも結構です。少し、お伺い
したいんですが。

——川端氏

二つの問題があると思っ
てます。

将来の道路のネットワー
クですね。それと、どうい
う交通が流れて、こういう
交通は流してはいけない、
そういう計画を市が持っ
ているか、どうか。

どうも、持っていないよ
うですね。おそろしく、どう
すれば良いのかと考えると
思っています。

その場合、他の方法はな
いか。たとえば、山回り
がバスで、あるいは、
あるいは、あるいは、

あるいは、あるいは、ある
いは、あるいは、あるいは、
あるいは、あるいは、ある
いは、あるいは、あるいは、

あるいは、あるいは、ある
いは、あるいは、あるいは、
あるいは、あるいは、ある
いは、あるいは、あるいは、

あるいは、あるいは、ある
いは、あるいは、あるいは、
あるいは、あるいは、ある
いは、あるいは、あるいは、

「小樽の歴史をどうするか、
倉庫をどうするか、
歴史をどうやって、
どうするか。」

ですから、博物館のほう
は、倉庫業者の方が中心
になって、流通とか、経済
とか、倉庫業者から見た、
ゆわのほう、展示館とか
博物館でも良いです。何
か、やってみようという
事。

今まで維持して来られた
人たちに協力してもらい、
何かをやってもらうよう
な形。

あるいは、地産産物を振
興して行くベースになるも
のだから、公営体が力を
入れて、今までにない新
しいものを取り入れて行
く。

そうすると、今まで経済
価値がないと考えられて
いたものが、送に出て来
ると思うんです。

そういう形で、倉庫を
整備して行くと思っ
ています。

——伏見氏

小樽の倉庫の問題をどう
するか、倉庫業者にも、
かたがたの歴史とか、
かたがたの歴史とか、

かたがたの歴史とか、か
たがたの歴史とか、かた
がたの歴史とか、かたが
たの歴史とか、

かたがたの歴史とか、か
たがたの歴史とか、かた
がたの歴史とか、かたが
たの歴史とか、

かたがたの歴史とか、か
たがたの歴史とか、かた
がたの歴史とか、かたが
たの歴史とか、

「小樽の歴史をどうするか、
倉庫をどうするか、
歴史をどうやって、
どうするか。」

「小樽の歴史をどうするか、
倉庫をどうするか、
歴史をどうやって、
どうするか。」

たとえば、歴史民族資料館
は、文化庁の予算措置でや
るもので、取り易いはず。
しかも、道と国の両方から
補助金が出ます。

ですから、何かをやるとい
う時に、じゃあ、どこを引
かけるか、という事。

漁業者には、お金が余っ
ていきますし、外部団体が
決まっています。

まず、そういう団体から、
水の水のお金を引き出す
わけですね。その時は、
基本的な構造の修理とか、
一部分に止めておくわけ
です。実績をまず作る
わけです。

そして、次に単省から引
き出すわけですね。
足助の小沢さんという人、
補助金を取って来る名人
なんです。

風呂敷包み一杯、資料を
ためて、背負って彼所へ
来ると言っています。すると、
道から引いて、金が来る
んです。

「小樽の歴史をどうするか、
倉庫をどうするか、
歴史をどうやって、
どうするか。」

第4回 歴史的建造物の保存・再生

— 制度的、技術的、経済的な課題をこえて —

講師	広田	基彦氏
	越野	武氏
	小島	一郎氏
	佐々木	興次郎氏

昭和56年6月5日
小樽市労働会館

講師紹介がおわって、

— 越野氏 —
今、紹介いただきました越野です。
今日の私たちに課せられましたテーマは、歴史的建造物の保存・再生ということで、副題に制度的、技術的、経済的な課題をこえてとあります。
実は、最初は広田さんと私と2人名前がのっかっていたんですが、今日になりまして4人になりました。
ここに広田氏、越野氏の体験談の中からという話がありますが、広田さんは別として、私はふだん大学で建築の歴史を勉強してるだけで、こういう保存・再生の体験は全くないんです。
それで、もう少し体験を広く集めた方がいいのではないかと、今日さらに小島さん、佐々木さんの2人に引きよ出ていただいたということなんです。
小島さんはいくつかの建物の再利用を実際に手がけられ

ました。
佐々木さんもやはり古い倉庫を喫茶店に改築するというような経験をおもちです。
それから、広田さんは文化的な建物の保存、修理、補強工事というようなことで、大変技術的な蓄積をおもちです。
それで最初に私が、一般論といいますが総論といいますが、少し席の口みたいなことをしゃべります。
課題にあるような歴史的建造物の保存ということについて少し考えてみたいと思います。
歴史的建築物の保存といいますがとすぐ思いつくのは、いわゆる文化財建造物の保存、修理というようなことです。
こういうことは古くからやられて、いろいろ技術的に蓄積があるわけです。
細部は別として、その原理は大変単純、簡単なことで、いわゆる復元 — 建物が壊れた当初の姿に戻していくとい

第4回

— 越野氏 —

この会を機に歴史的建造物の保存、再生に関心をもつようになり、再注していくという形を筆に描いてみたくて、

どこかの邊で、具体的にやられている所があるんですか。

— 川端氏 —

愛知県なんですけど、計画が立てられてます。ただ、事業としては、まだ日本ではやられてません。

外国には沢山あります。ボストンの歴史的建造物の再生は、非常に参考になると思います。

— 北村氏 —

なぜ、保存をするのかという点で、アムステルダムというお話がありました。その中にちらちらと、多岐津在籍が見えるような気がしました。

そうだとすれば、計画、計費はどの部分で、決まるとは思いますが、

その中で、どの部分で、決まるとは思いますが、

その中で、どの部分で、決まるとは思いますが、

その中で、どの部分で、決まるとは思いますが、

— 川端氏 —

その通りですね。ただ、モニテイを本多に強卸するのは、むずかしいですね。しかし、多岐津主義ではないと思うんです。

町並み遊覧のやり方も、いろんな地域から、いろんな人たちが集まって、何やかやと音いながら、作って行った。

これは、全く、地から生えて来たものです。

で、小樽を見ても、遠眺してる部分があるんだけど、逆にそれが良いと思うんです。

つまり、昔からの何となく多岐津でもない、何となくみんなが集まって、こうやろうかというものと、近代的な運動場が、相互に、フィードバックしながら、段々とやって行く、というのが、これからの別々の所に必要だと思うんです。

地からというのは、倉庫や、工場や、家や、商店や、学校や、病院や、役所や、銀行や、ホテルや、オフィスや、住宅や、公共施設や、商業施設や、文化施設や、教育施設や、医療施設や、福祉施設や、スポーツ施設や、レジャー施設や、その他や、

その他や、

うことである。
「歴史の足に足す。しなび
って、時には歴史的にも、あ
るいは使い勝手からいっても、
いろんな欠陥はあっても元
に戻すというようなことをし
にむにやります。

構造の技術に欠陥があつて
も、その欠陥があることが歴
史的に意味があるという場合
もしばしばあります。

例えば札幌の道庁赤レンガ
の修理、これはスレートの屋
根に復元されたのですが、復
元される前は鉄板がきになら
っていったんです。

あの場合も大変ムリをして
建った時のスレートがきに復
元しています。

技術的にいってどちらが安
全かというところからわか
らないところがありますし、大
変お金も苦勞もかけてわざ
と復元した。

しかし、実際はいろんな構
造的な補強、修理あるいは設
備の改良、そういうことが文
化財的な建物でもおこなわれ
ます。

特に、日本の明治の洋風建
築の修理というようなときには、
道庁の赤レンガもそうでは
すが、構造的な補強が問題に
なります。

それは、明治の初めに日本
が受け入れた洋風建築、その
中の石造だとかレンガ造の建
物は、日本には地震が多いと
いうことで、耐震性が低いの
もあっていただけです。

「元々耐震性として設計しな
いという場合には、少なからず耐
震性というように、ど
うしても補造的に新しくする
ということが必要な場合がし
ばしばしばあります。

例えば、大山の明治村に、
京都から移されたフランシス
ゴ・ザビエル教会という、外
から見ると石造に見える建
物があります。

あれは本当は壁はレンガ造
で、内部は木造という混合構
造だったんです。

移築の時に耐震性のことが
問題になりまして、レンガの
壁は外から見えないうちに、
鉄筋コンクリート造にかえま
して新しく作った。

いわゆる様式保存という、
形を保存するというようなこ
とをやった。

さらに最近、少し文化財保
存の範囲も広まりました、よ
くいわれる外観保存が問題に
なります。

それは、その建物が建って
いる都市環境を良くしよう
というので、内部は新しく色
んな機能に応じて使って、外
側は古い姿を残そうというこ
とです。

そういう事例として、この
5年ほど日本でもいくつが新
しい試みができるようになって
います。

その例で一つあげられるの
が京都の京都市役所です。

詳しいことはわかりませ
ん

「元々耐震性として設計しな
いという場合には、少なからず耐
震性というように、ど
うしても補造的に新しくする
ということが必要な場合がし
ばしばしばあります。

その時には、1層外側のレン
ガの壁の内側に鉄筋コンクリ
ートを新しく打ち込みました。

壁、床、屋根、全部鉄筋コ
ンクリートで新しく作って、
外側の壁だけを残した。

これはある意味では、日本
では初めての体験だったので
して、初体験ゆえのいろいろ
な苦勞があったかと思われま
す。

「元々耐震性として設計しな
いという場合には、少なからず耐
震性というように、ど
うしても補造的に新しくする
ということが必要な場合がし
ばしばしばあります。

っせり打ち出されてるわけ
です。

これがどうしてこんなこと
に打てるのか信じられないんで
すけれども、建築単価、ある
いは総事業費の単価といいま
すか、面積1平方メートルあ
たりいくらお金がかかったか
というのをちよつとあげとい
たんです。

これは1ドル220円で換算
したもので、ざつとご覧にな
りますと、3万円とか5万円、
せいぜい高くても9万円ぐら
い。

5年前ですから少し違うで
しょうけど、ちよつと信じら
れないほど安いんです。

そこにはいろいろな事情があ
って、日本にすぐにあてはま
るとは思いませんけれども、
とにかくはつきりと経済ベー
スにのっているということが
わかります。

日本では残念ながら、まだ
そういう事業は非常に少ない。

したがって、例えば今日の
テーマのようなことを一人の
専門家がちゃんと講演できる
というほどの専門的な技術体
系と聞いていますか、そういうこ
とを知っている専門家はまだ
全く育っていませんという状況
にあると思えます。

ごく普通の保全と文化財の
保全との保全のうだち中間にある
いろいろな保全技術、あるいは
保全対策というものは、これ
から日本では探っているが
なくちやならない。

しかも専門家はいろいろ
で、今の今日のような
んな意見が寄せ集められて
きてまして、それをれの体験
を生かして持ち寄ってでも何
とかしてそういう中間的なも
のをみつけ出していかなくては
ならない状態にあるのでは
ないかと思うんです。

私のは前口上でありまして、
これから少し体験を出してい
ただいたらいいいんじやないか
と思います。

三方ながめてみますと、お
藤りの小島さんが一番役者風
の、真打ち風の感じがします
から(笑)、この方は最後に取っ
ておきまして、僕の話と多少
関係するでしょうから、まず
広田さんからひとつ自由にお
話し願えればと思います。

— 広田氏

私は元々道庁の役人でござ
います。

10年ほど前に役所をやめて
設計事務所を自分で経営して
おります。

で、道庁におりました最終
の時は、百年記念施設建設事
務所長という、つまり百年記
念塔を作ったり、開拓記念館
を作ったり、道庁庁舎を作っ
たり、赤レンガをいじく、た
りするような事が最後の仕事
でした。

で、赤レンガの話もしますし
ますと、赤レンガは明治21年
にできたのが、でるんです。

明治21年に火災で中がすっ

かり焼けてしまって、そして外
側のレンガの壁だけが残った。

その時、このままじゃ階段
が本造で危険だとか、階段の
位置が真中に集まっていて危
険だとかいうんで、両側に階
段をレンガで付け足した。

真中にあります塔が、なに
しろ本造の上にはレンガ造の塔
をのっけてるんですから、ゲ
ラグラして、建ってから8年
ぐらいたって明治の28年か29
年にはその塔を取っちゃって
るんです。

そういう具合にすっきり形
が整っちゃってたというこ
ともありましたし、私たちが若
い時から聞いてたのは、クラ
シックの建築としては正統的
な様式じゃない、あんなもの
はダメだという説が非常に多
かったんです。

そんなことであんまり重視
をしなかったということがあ
ります。

それで26、7年ぐらいいから
30年ぐらいたったかと思いま
すが、庁舎を少し増築しなま
さならないという話を持ち上
がったんです。

その時我々はずすね、道庁
の2町画は札幌の大事なこと
にゲンと座ってて交通の障害
にもなってるし、あの赤レン
ガは取っちゃ、たらどうだと、
軽い気持ちでそんなことを言
ってたことがありました。

そんなことで真剣になて
赤レンガを取って、真中に6
二階の道庁をズバンと通して、

その少し後に庁舎の鉄骨をい
たというふうなこともござい
ました。

ある部長は、前庭の両方に
池がありますが、その池にビ
ロテイが足を踏みこんだよう
な高い建物を作りまして、そ
こから赤レンガが奥の院に対
して見える(笑)という案を作
った人もいました。

いよいよ庁舎を作ろうとい
うことになって、私の場合、
庁舎建設本部というところが昭
和37年でした。たのが昭
和37年でしたが、その年は今
年のような冷害でございまし
て、庁舎はしばらく見あわせ
た。

その代り、おまえさん達は
そのまま勉強しておれと。

こういわれて、知事から言
われたことは、赤レンガにつ
いて、赤レンガを保存するこ
うな角度で少し勉強せいと言
われたんです。

それで赤レンガのことをい
う調べたら、古い写真や
何かでしてきた。

これはなかなか大事な建物
なんだということがやっと認
識できた。

そんなことで、道庁庁舎の
位置は、赤レンガを残してそ
の後ろに作るということにな
って今の新庁舎ができたん
です。

赤レンガを残すということ
が決まって、いよいよ設計に
かかる段階になりましたのが、
庁舎ができて上がってまもなく

の昭和42年の巻ぐらいいましたか。

そこで藤野先生にもご参加をいただくことになったわけです。

その前に、一体赤レンガを残すとしたらどういう問題があるだろうかという、これをちゃんと使っていくためには、新しい建築基準法にひっかかって、あの建物をいじれないんです。

大規模の修繕工事をやるには、史跡の指定を受けるとか、重要文化財の指定を受けるとかいうことがないと、そういうことをやってはいけません。

新しい法規に全部引っかかっちゃう。

新しい法規に引っかかってしまいますと、赤レンガの中に、中京郵便局ですか、これと同じように鉄筋コンクリートでさらに中へ一歩身を入れなければならない。

で、そういうことをやると蓋の形態はまるで中についてはなくは、ちやうどということになりますね。

それでいろいろしがるべき先生方にご相談をしたわけですが、それはどうにもしようがないと、それではとても重要文化財なんかにならないよというお話しだったんです。

で、昭和42年の秋に文化庁の方がこれを見て、その時藤野先生と私がいろいろお話しをしますが、史跡の指定をなんとか実現されない

だろうか。なあと。

もともと本庁、そのは、敷地のど真中にあるんです。

それが明治6年にできて、明治12年に焼けてしまったんです。

そして、しばらく空地になってたところへ明治19年から21年にかけて今の赤レンガを作った。

その時は、明治13年に手賀から札幌に国鉄が走ったんで、北も条通りがなくなってますね。

それで道庁の敷地は1町減らして4町角になったんです。

で、4町角の真中に作ったから、前にあった札幌本庁とはちやうど半町違ふんです。

それで、ちやうど半町違ったところに札幌本庁舎の跡があるはずだと、そういう話でそこでたんです。

その時、ちやうど新庁舎の工事を始めていたところで、教育庁というのがちやうど札幌本庁の上に建てておりました。教育庁の本造が建つ前に道庁の庁舎がありましたし、その前には私が就職したばかりの時に、た庁舎がありましたし、3度も焼けてるんです。

で、3度もものかかって焼けてるところに、そんな痕跡なんかとてもあるまいと思っ

ていたんですが、その中庭をどにかく隠してあげた。

どうやって隠したんです。

をしたら驚くべきことに、札幌本庁の基礎がでてきたんです。

中が30cmか40cmぐらい、厚みが90cmぐらいの板、これはもう腐っておりましたが、その板の木の上です。石がのっかって、その上に杭の穴が空いてるんです。

それから、今度はその教育庁の建物をさっそく解体して、をして高倉新一郎さんを団長にして、そのの発掘調査をやったんです。

それから、開拓使札幌本庁の遺跡を全部出さないと。

そこで赤レンガを含めて札幌本庁のどこをみると、史跡の指定をもらっちゃったわけです。

史跡の指定をもらったら、もうこれは赤レンガをどのよう

にいじろうとこちの勝手になりません。

そこでいよいよ設計にかか

ったんです。赤レンガはとにかくものすごく高い建物ですから、このままでは危険だというんで、一番下の階を――半地下の階

ですが、そこだけは全部コンクリートの中に入れたんです。そして各階の床はコンクリートに直しまして、レンガの一番上には臥梁を鉄筋コンクリートでまわす。

そしてクワールの築かるところは、壁状のコンクリート

を打って、その上にレンガを

りのクワールを作る。

それから両方につき出して、階段室も元々はないものなので、それを取って、そこに行く廊下の部分が全部3階の鉄筋コンクリートの中に入れたわけです。

もし火災等がおきて危険なことになった時には、その廊下に逃げこめるという配慮をしたんです。

しかし、まあいう建物ですから、構造計算にはとてもならない。

完全な解析はできないわけです。

まあその辺はある程度まで設計事務所を検討はしたんですけど、まあこれからだと、まあどこでやってしまったというふうな経過がござい

ます。で、倉の話もいえば、当時

で、億がかかっているんです。

面積は約1,500坪ありますから、坪あたり20万円ですか。

今の額ですと、三倍半ぐらいになるだろうと思います。

あのころ道庁新庁舎も20何万がかかってますんで、1,500坪の赤レンガを残して、それを実際に会議室や資料室に使えるならば、新庁舎を作るよりは安く済んだ。

効果は十分にあったんじゃないかといつたものです。

赤レンガの話はそれくらいにして、当地の小樽新聞

記事が、野幌の森林公園、開拓

記念館の付属施設になります
市民公園の中に開拓の村とい
うのを仮称ですが作っており
まして、そこにはもはや線
が8棟、明治時代の建物を復
元しています。

その中にもってくるために、
昭和47年でしたか50年でした
か、この堺町にありました小
樽新聞社の社屋を道がゆずり
受けました。

そして解体をして、野幌に
もって行って、ストックをし
ておいて、54年にこれを復元
した。

で、構造はどんなものかとい
うと、18cmくらいの札幌軟
石を外側に張りつけた、そう
いう構造です。

あくまでもこれは木造だとい
えろと思います。

木造の石張りだということ
です。

昔の断面は、梁の下に天井
がくっつき、上に床板が張ら
れている。

上の階の床と下の階の天井
のウリアランスが50cm足らず
です。

で、保存工事の方は、この
ままでは今の法規がらみで当
然ダメですし、いくら開拓の
村というところが治外法界的
なところであろうと、こうい
うものをそのままやるわけに
はいかない。

大変危険でもあるというこ
とで、中に鉄筋コンクリート
を全部入れたわけですが、

今言いましたように50cm足

らずの床と天井のウリアラン
スの中に、鉄筋コンクリート
のスラブを入れて、逆さに向
いた上の方につき出た梁を通
して、その上に木造の床をか
けて昔と同じよう打形を作っ
た。

小屋組み等は座栗の材をほ
んど使った。

外壁の石もかなりの程度在
来の石をはずしてそれを使っ
た。

もう一つ言いますと、建物
を解体した時に、段々基礎の
石をはずしていきましたら、
さらにコンクリートがでてき
ました。

そのコンクリートの下に、
木杭を打った跡がやはり本庁
と同じように穴ぼこになって
数個ありました。

で、この色内の地区も同様
だと思いますが、選河谷いの
地盤というものがたぶん悪い
んじゃないかと思っております。

ただ、今から70年、60年
前に建てた建物ですから、そ
してあの石造倉庫という重い
建物ですから、何となく相対
的には若干の沈下が起きてく
る。

まあ、それなりにもってい
るんで、何かちょっとしたシ
ョックを与えると、唇、壁で
倒れたような、ああいうこと
にも結びつく。

よく調べてみないとわから
ないことだと思いますが、そ
んじょうを思いました。

小樽新聞、復元にどのくら
い銭がかかったかといえます
と、まず、解体をして取壊し
て札幌へもって行って野幌に
ストックするということに、
平米あたり4万円くらい。
今のお金にしまして35%く
らい増だと思えます。

それから復元の工事、これ
は昭和54年ですから今のにお
金にするとは2%くらい増える
と思えます。

そうやって計算してみます
と、これは坪あたり4万5千
円かかっていることになりま
す。

そのうちで、工工事から鉄
筋コンクリートの部分、てい
くのは今1千円くらい。

その方は、解体してもって
て支給した石材の値段が40
万円というんですが、それを
除いても3万5千円くらいか
かっている。

これに480万いれますと、
もう1万5千円くらいアップ
になりますね。

ですから、コンクリートの
工事よりも外に張った石の部
分の方が余計なんです。

そのように、石工事という
のは大変お金がかかるんだと
いうことを一ツ頭に入れてい
ただきたいと思えます。

私、今日のために2、3の
石屋に、札幌軟石で今、昔あ
った倉庫のようなものを作ら
うとしたら、サイいくらでで
きるという話をしてみたん
です。

サイというのは1尺角のこ

とです。
もしたら、わがらないとい
う話も返ってきたんです。

なぜわがらないんだとい
うと、石造倉庫というものは、
もはや15年も20年もやっ
たことかたない。

そういうものは今はもうわ
がらなくなると。

墓石しかわがらんという話
です。

そのように、なかなか石と
いうのは札幌軟石でも大変な
ものです。

もちろん小樽新聞は、倉庫
跡とはちょっとちがってござ
いますから、そういう点では
お金もかかったと思えますが、
およそ体ごとおこしてはずし
てもってくるというようなも
のですから、そんなにたくさ
ん新しい石材を確保したとい
うことはなかったと思えます。

—越野氏

どうもありがとうございます
でした。では次、佐々木さん
にお話し願います。

—佐々木氏

どうも、佐々木です。
自分の所は、別に小樽選河
谷いにあるような立派な倉庫
でもございませんし、また
魚籃館のような曲緒ある建
物でもないんです。

自分がヨーロッパを旅行し
た時にあたためたというか、
芽生えたというか、そういう
ような堅細竹藪をかかえたよ

う得意の店なんです。

越野先生からアドバイスを受けまして、動機とか経過ですね、どういう状態の建物にどういう手を加えたか、あと反響とかそういうこととお話ししたいと思ひます。

叫見構という店を始めた動機は、自分がヨーロッパを旅行した時にパリの運河沿いであるとか、アムステルダム運河沿いに、たく主人五派な与階建ぐらいの、本当にきれいな建物があるわけですね。

で、そういう所で若い人達が人形屋さんなりアンティークなり、まあちょっと新しいとこでいけばディスプレイですね、何かたくさんあったんですね。

それは本当に若い人達が生き生きとそこでするんはことやってるわけですね。

自分は小構生れな人ですけども、高校を卒業して小構がイヤでイヤですぐ飛び出してブラブラしてたんです。

その時にヨーロッパに行つてみて、待てよ、どっかにあったんじゃないか、自分の生れた小構じゃないかということ。

そこで、いても立ってもいられなくて帰って来たわけなんです。

今使ってる倉庫というのは、自分でやってるせいか、自分で古くなくて、かといって決してパキパキしてない、重々しく響かぬと云えるようなものなんです。

まあ、どうしても頑丈な、どしどししたような建物が欲しかったということ、自分も札幌にいた時には今みたいな商売で働いていましたので、自分の些細な夢ということ、小構で一所懸命そういう倉庫を探していたわけなんです。

自分は古いものが好きで、骨董屋さんと親しくしてたんですけども、その骨董屋さんが小構に商売替えをするんで倉があくから、お前、前にいってたがどうだということ、さうそく飛びついてお借りしたわけなんです。

そういう店があつて、設計屋さん頼んでから2ヶ月間ほどにかく開店したんです。

自分が札幌にいた時僑業してた店を作った設計屋さんが自分のアイデアを實際的に図面どひいてくれたんです。

それから、今度小構に行きまして、自分の反響が材木屋をやってましたんで、とにかくお金持いと、お金持くても本当に安くやってくれるような大工さんいないか、ということ、大工さんまで紹介してくれて。

その材木屋のオヤジさんが、ほとんど原価と同じくらいでだしてくれました。

大工さんの方も、何の保証もないのに、とにかく2年月保証にしてくれといつたら、一言で、じゃ2年月保証ということ、月限に名してくれば、いい。

間口2間、奥行3間、6坪の小さい店なんですけども、小さいわりにはすごく柱、梁とも太いんですね。

作ってる段階で一番極んだことは、まず入口の決定なんです。

ここに平面図がありますが、1階部分で入口が向って右側についてますけれども、これは元来の入口じゃないんです。

カウンターと書いてあるいすの裏側にちょっと区切ってあるところが昔の正式な倉の扉なんです。

そこから人を出入りするようにしたいと考へたんですけども、今の店の半地下がグラウンドラインから1m20cmぐらい下がってて、1階の床、つまり半地下の天井が人間が立って歩けないよう状態だったので、2mまで掘ったんです。

それでそこからの出入りが不可能だったもので、敷石をチェーンソーで切りまして現在の所に入口をつけたわけなんです。

それから、トイレの位置の決定と排水ですね。

この倉は、昔、呉服屋さんが大正の末期に作った倉なんです。

呉服屋さんですの、反物をしまつておくと湿気を大変嫌います。

それで、床も厚さ約50cmの捨てコンを打つてありまして、それから地下1階の床からグ

ラウンドラインの上約50cmぐらいまでは、一番高いところで30cmのすそ広がり自形コンクリートとモルタルのサンドイッチ構造で防水をしてあるわけなんです。

それを打ち破るのにまず3日ぐらいかかりました。

それから、店の雰囲気作りとしては、2坪の3階建てですごく狭いんで、どうにか空間の広がりをもちたいということ、玄関を入りましてすぐ上まで吹板にした。

それから、小さいのでワンフロアごとに雰囲気を変えようということ、地下のフロアは真中に大テーブルを置きまして全部で15人座れます。

1階には絶対カウンターを置いていかなきゃダメだということ、厨房とか入ってまですんで8人座れます。

2階の方は3人がけのボックスで5席とりまして15人。

真中には本当は吹板をやりたかったんですけど。

今は鉄線の入ったガラス戸がうめてあるんですけども、以前は透明ガラスを入れてたんです。

上を見ると、そこを歩く人の全部見えるもんで、すりがうすに覆えたんです。

それから、壁の半分までは板を張つて、あとの方は柱と柱の間は全部敷石を出してあります。

これは自分がどうしても観念を置きたいということ、

見ようかというにやめてくわした。

まあ一番大事なことになるけども、何年たっても変わらない店ということで、自分の目標は小樽にある「光」という喫茶店のような感じをぜひやってみたい。

20年たっても変わらないような店を作りたいということで、材料も本当はラウン使いたくなかったんです。

どうしようもなく材料が集まりませんもん、ラウン使いました。

それも一獲千金ぐらいの本を切りまして、無理やり合わせてポンと柱と柱の間に入れました。

オイルステンを約8回ぐらい塗りまして、透氣性が全然ないもので、一日いれば本当にシンナー中毒にかかって。

25日ぐらいで店を完成してやった次第です。

かかった金額の方は、一応18坪、坪だいたい30万かかってて540万円です。

あと、厨房備品だとかそういうのは自分が古いものを集めてたせいで、骨董屋さんで1把ひとからげの安い値段で買うことができました。

反骨としては、自分が木骨石葺好きで好きでたまらなく好きで使ったんですけども、あまりにも建物にあこがれるので、建物の状態が本物のからかかって後、たまたま、かたがたの古道具が建じた。

まあ1つに、軟石なりまして、そして柱が、壁があるんです。

そして、管は柱の表側に壁板を打ちつけたんです。

それで柱と軟石の間に10cmぐらいのすき間があるんです。

それがダクトといまして、換気扇使う時に上から下まですき間を流りまして風がぐーんと曲っちゃうんです。

だから、なんぼ地下でストープを入れて暖めても、すき間から冷たい風が吹き上げてくるんです。

それから、夏涼しく冬暖かというのは、倉庫として使ってる時はそうなんですが、中で厨房の火をたいてますと、それがもう全然反対になります。

そのせいでしようけども、音がもりがすごいです。

最初、まあ石が鳴いてるみたいだ、という感じに喜んでたんですけども、とてもじゃないけどそういう感じじゃなくなってきた。

ドードーと上から下に軟石を伝、て水が流れるんです。

それから、軟石の風化が湿度差とかすがもりのせいで、ちよっと早くな、たような気もします。

それから、無理やり穴あけて給水、排水作、たんですけども、やっぱり今の防水の技術を流してやるとも、古一とこには必死で、たまたま、かたがたの古道具が建じた。

でも、外から入ってくる水を防げない。

1年に1、2回は半地下がほとんど水びたしになるというような状態になります。

それから、中で火を使うということで、昔は瓦の上にあいた雪は自然にとけてなくなるそうなんですけども、雪がそのままたま、て下の方が氷状になるんです。

これもたぶん、屋根に保温材を入れてないせいでしょうけども、そのままたま氷状になって、雪になると瓦の形をした雪がそのままたま落ちてくる(笑)。

あとは、床が薄いせいか、歩く足音がかなりするということ。

そのぐらいが反骨点です。

ま、今度倉を使う場合は、日光のあたるようなところですがすがしくやってみたい、というのが本音です。

— 越野氏

どうもありがとうございます。

では最後に小島さんをお願いします。

小島さんは大変経験豊富でありまして、こういう再利用のコンサルタントでもやろうかというふうなことを言ってるくらいですから、いろいろお話し聞けるとおもいます。

ありがとうございます。

小島でございます。

僕は5年前に仲間と小樽に来まして、これまでに運河のそばの建物を2つ改造してます。

今、広田さんが言われた道庁の建物の改造のようなプロの話とは全然反対の、要するに素人のやり方、というか、何にも知らない人がやると、こうなるんだ、という奨励を2つお話ししたいと思えます。

それで、ともかく小樽に来たいきさつをしゃべると、5年前に来た時は冬で、思ったより建物が立派でびっくりしたという印象があります。

僕ら踊りの仕事で全国まわってますので、こういう街が全国にあまりないってことは確かです。

それで非常に喜んで改造にとりかかったわけです。

別に運河のそばっていうのを全然意識しなくて、たまたまいい建物が運河のそばにあつて、それを借りたということ。

まず、僕ら何やってたか、いいますと、踊りやってますので、古い古場を作った。

で、もう1つはそこに住む。古い古場ってのは住む所です。から、古い古して住む所と、もう1つパッと建物の見た時に非常に目立つと。

で、この建物は名物になるだろうということで、店をやろうという意思が、ありまして、小樽の人と協力してやり始め

たわけなんです。

倉庫の長所というのはい目立
つということ、要するに小構
にしかないっていうことにあ
ると思います。

短所としては、やっぱり住
んだりする場所ではない。

それで、非常に改造しにく
いということがあると思いま
す。

僕らの場合は、大きな倉庫
はムリでも、まあこれぐらい
の倉庫ならできるだろうと。

それで、海猫屋は24坪の広
さの3階建てです。

叫見様さんと違うのは、全
部レンガで、木の柱は入って
ないことです。

で、とにかくレンガの筋が
ポンと置いてあって、それに
横梁がわたしてあって、床が
張ってある。

とにかくただの倉ですから、
怒もないし水道もないしがス
もなくて、便所もない。

それで、そういうことを全
部自分達でやるために、まず
何を考えたかっていうと、と
にかくお金がないので、これ
だけの予算内で全部おさえよ
うっていうのがあります。

24坪の3倍ですから72坪に
なるわけですが、初めはそれ
を大抵300万円ぐらいにおさ
えてくれと言われたんで、どう
しようかってことで、僕ら自
分達でやりますので人件費が
かからないわけなんです。

それで、あとは材料をどこ
で安くできるかっていうこと

とです。まあ盗むと泥棒
になりますので、やっぱり拾
ってくるしかないんじゃない
かってこと。(爆笑)

どこに拾いに行こうかって
ことで考えまして、いろいろ
人に聞いた末に、小構のいろ
んな古い家を壊したあとの材
木とか家具とかが全部天神町
のゴミ捨て場に集まるって
いう話を聞きました。

それで、トラックを借りて
そこに行くと、次から次とト
ラックがやってきて、ガンガ
ン捨てていくわけなんです。
で、ものすごく喜びまして
(笑)、これでまあ100万ぐらい
は浮くだろうと。

午前中は毎日拾って、午後は
建築と。
で、古い材料ってのは物も
けっこういいし、釘抜がなく
やいけないうし、というシンド
もありませうけど、ちがちな
とかそういういい点もすごく
ありまして、それで何とかや
ったわけなんです。

具体的には、男4人が1日
10時間から12時間ぐらい働
きまして、3ヶ月かかりました。
それで、一番シンドかった
のは、怒をあけるとかそう
いう構造的なことになると、僕
ら素人なんでよくわからない
んです。

ここに怒をあけるとちよっ
と危ないんじゃないかとか、
その辺はもう一つの勘という
か(笑)、そこは現場作れば
わかることと、そういうこと
で、

た。
で、窓の縁は怒だらけ
って感じになりました。

それで、上を仕切、て住居
にして、2階をけい古場にし
て、1階を店と。

で、ちよっと1階作るのに
1月かか、て、それで6月に
オープンした。

材料費が結構安くね、たっ
ていうのは、例えば、テー
ブルなんかは、小構の昔の商店
の看板が大きな木でできて
おりましたので、そういうのを
使ったんですよ、それを安くも
ら、て、壁のニスも塗る。

そういうふうに全部や
ったわけなんです。

誰かみてももちろん素人作
り、てのはわかるんですけど
も、ただそういうのも売りの
ものになるっていうこともあり
ます。

ですから、僕らとしては店
ができてそれでいいわけとい
うことで、いまとかテーアル
とかは金かかた時に買い換え
ればいいわけで、とにかく作
っちゃうっていうことが前提
だ、たんです。

それで3ヶ月でとにかくや
りました。

そのあと現在も営業してお
りまして、ずっとその2階
でやってきたんですけども、
やっぱり小構でずっとやりた
いってことが出てきました。

それで、新しいけい古場が
開いた。

で、誰のやらしてる音楽と

めがバンバンかかって、さ
まよって踊りの雰囲気でもない
というふうになりました、そ
れで近くを探したところ、ち
よっとあのところは3階のシ
ョールームになってた建物が
あぐ近くにありまして、大家
さんに話して、三菱が出た時
に僕ら見にいって、空いてる
ので行っただけなんです。

それでそこも借りたわけ
ですけども、家賃は、10回ぐ
らい大家さんにいって、とにか
く自分らで改造するから家賃
安くしろってことで。

別にそういう理由はおかし
いんですけども(笑)。
本当は友田先生のような方
がおられたら一番良かったん
ですけども、僕の友達を建築
の専門家だといって、おたく
の建物はものすごくいい建物
である。

由緒ある建物で、これは残
さなくちゃいけない。
しかしものすごく腐ってい
る。

床の下から天井裏までメチ
ャクチャクで、今これに手を加
えないと非常に大切な文化遺
産が壊れるからというふう
に言ってもらって、それで家
賃を安くしてもらおうという
ことがあった(笑)。
海猫屋と違うところは、海
猫屋は倉を改造して住居にし
たわけですけども、今回は初
めから住居に作ってるわけ
なんです。
それで反対は店には、た。

大正三年に建てられた前橋商店という金物問屋の建物は、建てたばかりで、ちよと海猫屋を作る過程と反対です。

大体の具体的な数字だけ言っておきますと、相模わらず人件費はタダで、それで8ヶ月かかりました。

改造した坪数はう階段で75坪で、全部で800万円かかりました。

改造した面積は150坪ですから、坪で大体5万円ぐらいの安さです。

なんでこんなに安くできたかといえますと、相模わらず材木なんか捨に行ったりしたんですけど、相当人件費を、タダでということに最大に利用した。

ちよとこの時は夏で学生が休みだと、それで僕ら踊りの仲間が全国から集まってきたので、要するに小樽でこういうことをやるんだと、で、建物作るのほものすごくおもしろいと。(笑)

小樽ってのは北海道でいいところで、泊らしてやみから遊びにこい(笑)というふうに言いましたね。

夏は15人ぐらい男を集めまして、日曜日だけ泳ぎに行ったりして、あとの日は朝の8時から夜の10時までムチャクチャに働いた(笑)、ということでした。

それでもやっぱり立てた時はうれしかったけど、もういう意味で僕らもいい意味にな。

た(笑)ということをはかっています。

遼河のそばの倉庫を改造するということは僕ほものすごく賛成で、むしろだけ協力したいと思ってるわけなんです。

それで、僕の建築哲学みたいなものをちょっとだけ言わせていただきますと、建物を作ることで体がすごくおもしろいことである。

で、場所を持つてるといことがものすごく強いと申しますが、一つの拠点が具体的にできるわけですから、持つてるだけで何物かである。

僕の具体的なプランは皆さんと違うかもしれませんが、大塚倉庫っていうのがありんですけど、何が面白いのに2億円ぐらいかかるらしいんです。

僕は金が全然ないんですけども、できればそこを買っていただいて、劇場にしたい。

大塚倉庫ぐらいの大きさの倉庫を改造して劇場にすれば、おそらく今、市民会館でやってる備物の半分ぐらいはできるんじゃないか。

いろんな街にいろんな市民会館、劇場がありますけれども、そういうふうな建物自体がおもしろい劇場がある街は日本中にはないわけなんです。

どうしても、踊り手ですから熱狂っていうふうにならなければいけません、で、そういうのが僕らの為なんです。

——越野氏
かちもまりがとつごでいます。

このあと、まずここに並んでる4人の中で、お互いに質問がありましたら。

——広田氏

これぐらいの規模になると、大規模な改修工事をやるところで用途も変えたということ、本日は建築の確認申請を出さなきゃならないんです。

これから石造倉庫を何とかして保存していくというが、海猫屋という方が私は正しいかとは思っていません。

とにかく、道庁赤レンガのように重文の指定にできるとか、野幌の開拓の村を持つていた小樽新聞社とか手宮の駅長官舎とかは、道庁の赤レンガを除いては人は住まないんです。

ですから、そういう問題になることはないし、治外法権的になつてる部分もありますし、さほど問題はないわけです。

しかし、小樽の石造倉庫の場合にはこれは何かに使っていくかにはならない。

何かに使っていくということになると、その用途、それからあの地域の用途地域というのがありまして、どうもうかがってすると工業地域らしいんですが、一部には、中央橋から南こう側は準工業的な

かもしれません。

それから準防災地域にもなつてくるようです。

そうなりますと、建物の用途によってはみんなひっかかっちゃうということが起きるようです。

そういうことを考えると、必ず行政のチェックを受ける。

そうするとやはり相当難しいいろんな問題が出てくるのではないかとまあという感じがいたします。

——越野氏

広田先生、この話はまたあとで議論するようにしたいと思うんですが、今、さしあたりこの魚籠館の改築で法的に問題になりそうなところというのはありますか。

——広田氏

魚籠館のこの場所は、いったいどういう地域になるんでしょうね。

商業地域ですか、だ。たら別に問題ない。

——越野氏

3階に住むと問題です。

——広田氏

洋舞のけい古場、練習場ですからね、そう問題はないです。

もし工業地域だ。たらどんなものがタメかといえますと、ホテル、旅館、待合、海猫屋、キャバレー、舞踏場、相

窓付きの劇場、劇場、映画館、深窓または観覧席がダメという事に決ります。

住宅にもなりませんし、非常に限られた範疇になりそうなのがいたします。

— 小島氏

倉庫で売ってのはどうなんでしょうか。

— 広田氏

店舗はいいんじゃないですか。

— 越野氏

運河沿い、あるいはもう少し大きな石造倉庫の話はこれから少し議論しようと思ってるんですけども、佐々木さん、何か小さいこと聞いておきたいことございますか。

— 佐々木氏

今のところ別にはないです。

— 越野氏

実はこの1月や2月ほど、私の研究室にも妙な人間が飛んできてきて、小樽とか札幌の古い建物を、映画館にしたいとか、レストランにしたいとか、美術館にしたいとか、そういう相談にいられる。

さきほど言ったように、そういう希望も、今、大変強く持ってる人だろーと思えます。

で、それに答えるだけのものでないか、あるいは、

ら、いっしょに往生してしまおうんですが。

今日、聞かされてる方もいろいろの方がいて、中にはそういう具体的な希望を持っておられる方も、あるいはおられる方も、あるいはいろいろの意図で関心もおもちの方がおられると思います。

この今人だけじゃなくて会場におられる方も含めて、いろいろこれから質問やら議論やらしていきたいと思えます。

— 堀氏

広田先生に。先ほどの小樽新聞社の復元の費用の点で、RCで4万円かかったとあって、しゃーたと思うんですけども、それは坪あたりの単価ですか、それとも平米あたりですか。

— 広田氏

平米です。これは、普通の柱かたって梁がかかって基礎があってという式の、普通のリブタイプのRCの建物で、今でしたら5万円前後かかると思えます。

ですから、これは安い方ですか。というのは非常に単純な箱型の壁式構造な人ですか。それでわりあい安上りにできてると思えます。

— 北村氏

佐々木さんに。さっきも言いましたが、しゃーたんですけども、すがもりな人ですか、

裏にできるか。

さきに屋根の上の雪が落ちて、それが瓦の間に溜まってくるわけですか。

— 佐々木氏

いえ、そういうことはないんですけども。屋根の雪は、そんなに多くなくて、屋根の雪が落ちて、壁に伝わり、で落ちるんですけども、外側の壁を。

そして冬、夜中寒くなりますとそれが凍りつくんです。それが今度、中に入ってくるんです。

— 広田氏

先ほどの佐々木さんのお話して思いついたんですけども、瓦屋根がきれいに残ってる倉庫が多いんですね。

で、瓦屋根というのは非常に傷みやすい、北海道では傷みやすいものな人です。

ところがきれいに残ってるっていうのはなぜだろうか。

私は、中で暖房しない建物、つまり倉庫であって外気温と同じような状態に中がなっている、だから屋根の雪はあんまり積極的に溶けない。

そのために瓦が傷まないんだと思えます。

もしこれが暖房し始めると屋根の雪がどんどん落ちて、それが軒先へまで氷堤をつくる。そうすると、そこから雪が溜まりやすくなるという現象が起るだろうと思えます。

ですから、瓦を溶かす時はもちろん天井の十分な断熱をしなければなりません。

それから、軟石の厚さが30cmもある人ですから暖かそうに見えるけども、佐々木さんのお話の通りに、これは30cmありましても保溫的にはあんまり足しにならない。

それこそ冬寒く、夏熱いというのは、それが原因だと思えます。

特におもしろいと思ったのは、内側に柱をつけて、それに壁をはって、そして下の暖気をどうフトさせるようにしてるらしいんですが、そこから冷たい風がドンドン出てくるというのは、逆に上昇するよりも冷えて重くなる、た空気が下に下がってくるということが圧力的にきいてくる。

そういう現象で、家の中全体が寒いんじゃないかなあという気持ちがありました。

— 佐々木氏

広田さんに、小樽新聞社の復元で、在来と保存工事で、在来の場合は木造石張りですね、保存工事は木造の部分コンクリートで上から固めたわけな人ですか。

— 広田氏

鉄筋コンクリートの壁、薄いという人ですか、柱の薄い壁と床のつながってる、そういう話を先ほどしてきて、その外側に貼っていった

石を全部張ってある、ということですか。

—佐々木氏

木造石張りの、木造の部分はないという……

—広田氏

木造の部分はなくなったわけですね。そして、内側から見れば昔と同じように見えるが、その中身は木造ではなくて出来てる。

—佐々木氏

それから、京都の中京郵便局と同じ方法で復元したと。

—広田氏

そうですね。

—越野氏

少しお話を広げてゆきたいと思います。

先ほどから、運河沿いの大きな営業倉庫—石造倉庫の保存に関係して話に入ってきてます。

ここにお集まりの方は、小樽の石造倉庫の保存、あるいは再生、再利用などに大変関心がおありかと思えます。

小樽の石造倉庫というのがどういうふうになっているのか、ほとんどの方は良くご存知かと思いますが、ちょっと簡単な図面用意していただきましたから、それを張ってながめながら議論していったらと思っております。

ここに張り出したのは、小樽にある営業倉庫の断面図を簡単に書いたものであります。

巾が10m80cmぐらいで6間、ここに床がありまして、これが木の梁です。だいたい2間半、4m50cmぐらい。

これは小樽倉庫株式会社の倉庫の1部の断面図ですが、まあ小樽倉庫に限らず、大体こんなふうには、ているかと思えます。

小樽の石造倉庫と普通言いますけれども、広田さんの小樽新聞社の話で出て来たように、建築の構造の考え方からいえば、実は木造なんです。

外側に軟石が張ってあって、その内側に木の柱がたっている。で、屋根も木造で、元々はほとんどの瓦が瓦がきだったんですけど、一部鉄板に変わっていった。

このカを受けてるのはもっぱら木の柱で、本体は木造だというのが小樽の石造倉庫の姿です。

これが、小樽新聞社のような倉庫でない建物も、小樽ですとしばしば同じような構造で建てられているというのが、小樽の今までの建築の大変ユニークなところでもあるんです。

道に、これを再利用しようとする、いろいろな問題が出てくる。

先ほど広田さんが話されたように、これは法規。

道にいろいろ人は建築関係の

—広田氏

さうも申しましたように、全体的に準防火地域がかかっている。それと用途地域が工業地域であるとなると、さう言ったような建物は建ててはいけないことになってる。

何に使うかということも、まずその辺から模索しなけりゃいかんのかな。

店舗のようなもので、500m²までのものでしたら、これは特殊建築物という扱いを受けないですむ。

そうすると比較的楽なんです。そういう店舗等で、大家倉庫みたいな、あるいは大同倉庫みたいな巨大なやつは別にして、その他のものはどのくらいの大きさがあるかなあと思ってるんです。

は、まじりはわかりませんが、間口が6間とか8間ぐらい、奥行も12、3間ぐらいのものが多いのではないかなあという感じはしております。

そんなことで、70坪ぐらいにあっても230m²ですか、500m²あるものはめったにない。

だから、そこに蓄かかっている程度のものであれば、店舗にはもう面倒はなくなる。

もし店舗にするんだと、準防火地域がかかっておりますから、簡易耐火構造という構造制限がかかる。

そうすると、どうすればいいかということ、外壁がたまたま軟石張りで、耐火的には非常にしっかりしてるので、こ

うまいつとってみても、とにかくその法規の類定では違法ということになりますから、いろんな問題も出てくるというふうなことを含んでいろいろわけです。

それで、これをどういうふうに使っていったらいいか、あるいは元の時どういうふうな補強なり改造なり、あるいはこのままでも使えるとか、そういうことが元来問題でありまして、そういうことにちやんと経験をつんだ人間がいれば、別にこんな議論をする前にちやんと初めにしゃべれるわけですね。

実際に、小樽新聞社のような例はないことはないんですけども、再利用にからめて客格的にやっている経験をつんだ方ってというのは非常に乏しいわけですね。

従って、いけば何にもないわけですね。これからの研究課題、それをここではどうしたらいいかっていう答はたぶん出ないと思うんですが、いろんな問題がある、あるいはこういうことは必ずしも考えなければならぬ、そういうことはいろいろ出てくると思うんです。

そんなことを残りの時間、少し議論していったらどうかと思えます。

先ほど、法規のことを広田さんからしゃべり始めましたから、もう少し補足してくれて可、こうです。

行政の者が耐火構造だといふ場合に認めてくれば、あとは隣からの延焼のある部分で、屋根を防火構造にするということをやれば、あとは上の方は金属板がまじい。

野地板も木色板ぐらいでよさそうだ。
そんなことであれば、きめて案になるという気はいたします。

ただ、土もちょっとふれましたが、基礎が杭打ちであった。その杭のあとは、今はもうみんな穴になっちゃってる。でなんとなく不同沈下もおきている。

あるいは、大体どでかい石を外側に使っただけありますが、屋根の荷重や何かを支えておられるのが内側の木造でして、その木造が傷んでますと、外側の石はどうやら自立はしてませんが、大きな地震でもきますと逆に木造の負担になる。

荷重になってかかってくるという様なことがありますから、構造計算をチエックし直すという様なことになつてくると、これは木造ではとてもダメだという話が出てまいります。

恒久的に、本当にしっかりした建物にしていこうというならば、私はいったんバラして、むしろ鉄筋を立てるとかあるいは鉄筋を立てて外側に鉄骨を張りつけたらいいかというのを、一応手堅い方策のうちと懸念します。

が、そういうことをやりなすと、これは小樽市に負担がかかっちゃうやう、かなりお金がかかるといふことになります。

本当にもっと、用途を決めておいて、建物の大きさを決めて、法規的にどういう所が問題になるかということ、1つ1つ検討しなければいけない。

——越野氏

あまり一般的な話をしててもダメで、例えばこんな具合に使ったらどうかというのができれば、それに対して、構造的にこうしたらいいとか、法規的に違反だとか、そういうふうに多少わかってくる。

おそらく建築家、専門家の方は大体そんなふうにお考えにいらっしゃると思いますが、具体的に話を進めていきたいと思ひます。

佐々木さんね、例えばこんなように倉庫を使いたいという様なことを、無責任でいいですからパーッとあげてみてくれない。

こんな具合にしたら使えないかなという様な……

——佐々木氏

今、現実に倉庫の中心は鉄工所だとか、そういうものを営業して、遊ばしたり切、たすけたりして居るんですけども、もっと正確なものを、小樽工務センターですが、

は、まあいろいろのを持って来まして、高さがありますから2階みたいなものを作りまして、工芸品を作ってる作業を見られるような、2階に回し廊下なんかあって、その中でコーヒーでも立ち飲みしながら、ビールでも飲みながら、そういう作業を見れるようなクラブセンターなんか、本当はずっと上げるだけじゃなくて、現実を作っていききたいなまとは思っております。

——越野氏

小島さんなんかどうですか。先ほどは劇場の話でしたが。

——小島氏

これだけたくさんある所ですから、1つだけ借りるっていうのが手堅いと思うんです。街ぐるみで保存っていうように、全部を博物館的にする。

今ある博物館を運河のそばに移してくる、そして図書館ここに移す、劇場もある、それに佐々木さんの言われた工房もある。

何というか、小樽の文化というものが集まってるわけですね。

今、文学館とか美術館もビルの中にありますが、そういうものもここにもって来て、ここに来れば小樽のことは大抵わかるというふうにしたらいんじゃないかと思ひます。

——越野氏

広田さんね、今、仮りに広田さんの事務所、クラフトセンター、博物館、文学館、図書館、それから劇場とか、相談でも受けたとします。

すくま、先に出てくるような問題で、こうしたらいいという提案、こんなものがあるとかお話しいただきたいんですが、何がいいかしら。

劇場がやっぱり最高の問題、問題になりすぎるかしら。

——広田氏

劇場は問題ですね。私も法規屋じゃないもんですから自信がちょっとないんですが、とにかくダメとはっきり書いてあるのはダメなんだと思ひます。

もう一度言い直しますけども、工業地域内に建築してはならない建築物は、ホテルまたは旅館、待合、料理店、キャバレー、無蹄場その他これに類するもの、個室付きの浴場業にかかわる公衆浴場、劇場、映画館、演芸場、または観覧場、学校、病院とこうなるわけですね。

何かやりたいものは皆ダメみたいな感じになっちゃうんですよね。

——佐々木氏

工業地域ですか。準工業地域ではいいですか。

——森下氏

小樽倉庫までは準工業地域

で、それから北の方は工業地域です。

— 広田氏

私、この間、このために運河をちょっと考いてみたんです。

で、その時思ったのは、1つは運河が湾曲している、そしてピスタになっている。

それと、日本の古い街並みにはよくあることですが、自壁の腰がなまこ壁とか板張りである倉庫がずうと建ち並んでいるというやつは、北海道にはあまりないんです。

それがここにある。その建築的なおもしろさは、倉庫1つ1つでは何もおもしろくない、あまり凝った建物があるわけではない。

小樽には、たまたま大家倉庫のように立派なものもありますが、その他の倉庫は犬吠したことはない。

そういうものが軒を接して、三角の妻をずっと並べている、それが見通せるというところに、私は運河沿いの町並の良さというものがあると思うんです。

それをいじくって、中を間引きしてみたり、その間引きしたところに何か別の、全く異種の建物が建ててみたり、倉庫の外壁に窓をやらあけてみたり、というようなことをはじめると、おもしろい。たまたまのことがあつたか、おもしろいんじゃないかという気があつ

つとしてるんです。そういうことからいうと、全部が同じものでなくてもいいけども、かなり接近して建ってるという感じの倉庫群が、と棟なりと棟なりあって、空間地があつてあつてというぐらいになつてくと思うんです。

これも運河全体の1,300mにわたってやったら大変な投資になるし、そこに一体何をやるかという、さらに大変なことになる。

そういうことからいうと、運河がずうと連続して湾曲してるというところは割愛をして、残念だけれども、あの立派な博物館付近にしばらく、500mぐらいの運河と倉庫を再現してはどうかと。

その方が、ずうと実現性があつたらうな気がするんです。

— 森下氏

逆にですね、例えば劇場を作るんだとすれば、それが建てられるような用途地域に変更すればできるわけですね。ですから、その可能性があるかどうかというのが一つの課題になると思うんです。

あと、今回の研究講座の第1回目で森野氏が、あの方いろいろ商業的な建物をずいぶん建てられてるんですけども、その方の目から見ると、例えば小樽倉庫ぐらいの大規模なものでレストランにすれば結構

別にさう分けてやるんじゃないかというふうなことをお話ししてくれてるんですけども、現在の用途地域その他の指定で、レストランというのとはどうなんでしょうか。

— 広田氏

あの料理店というやつですか(笑)。

僕はダメだろうと判断します。大きなやつ、てのは500坪をこえたりしたら、とって石造倉庫のまま——石造の中に木造があるままでというのにはできないんじゃないでしょうか。

— 北村氏

小樽倉庫っていうのは、真中に事務所棟が建ってまして、1番倉、2番倉って名前がついてまして、もともと中庭にあって、たような部分にも屋根をかけて倉にしたりしてますが、パッと見れば1つのものなんですけど、それを何とか6つのものに数えるという方法はないんですか。

— 越野氏

広田さん、今の500m²というのは一敷地内ですか。

— 広田氏

もちろんそうです。

— 越野氏

防災区域で分けることはできるんですか。

— 広田氏

防災区域で分けるっていうのは困るんじゃないですか。建物の面積がいいからならね。もしそれを500m²以下にしようと思うなら、今モン切ればいいだけのことでいい。ものを小さくしてしまうわけなんです。

— 越野氏

今の小樽倉庫に関していうと、例えば6間の、1番大きなので20間ほど、120坪。

— 広田氏

それならいいんですよ。それが2面に分かれてるわけでしょう、ですから、1つ1つのものにすればいいんです。そういう具合に敷地を分けてやらないとダメですが、ただその敷地が今決めた建ぺい率を、分けてもオーバーするんじゃないかと問題になるでしょうね。

— 森本氏

去年の運河講座で、旭川の五十嵐さんがみえまして、あの運河地域を手工業の町にしたらどうかということで、ガラス工業とか、今言われている手工業を全部もってきたらすばらしい町になるという構想をおっしゃられたんです。今、いろいろなお話しを聞いてみますと、工業地域、準工業地域、それからその中に文化施設がどう調和していくか

それから、中には市場を作り
たいという人もおられますので、
そういうものをいっていいが、
あの地域でどう調和できるもの
なのか、できないものなのか、
もしおわかりでしたら。

— 広田氏

手工業みたいなのは、た
やすく工業地域のまきでもな
ると思います。それから店
舗ですね。

そういう手工業の工場で作
ったものを売るような、店舗
のようなものを可能だと思
います。

この辺になりますと、小樽
市の窓口がどういう答えをだ
すかね。

私がここで言っても、い
やそんなのはダメだ、と言う
かもしれないので、私はそれ
こそ市の建築指導課の人を入
れて話しあってみるべきだと思
いますよ。

それから、先ほどの森下さ
んの話の中で思ったのは、全
域にわたるような大きなこと
じゃなくて、半分なり1/3な
り考えて、そしてその地域を
公園化するとか、その中に倉
庫群がある、博物館もある、
そういうことを言ってきた
かっただけです。

工業地域を変える。それ
を500mにわたる旭橋のあた
りから一番奥までですね、あ
の地域を隔って全部を工業地
域にするのではなく、むしろ公園
のようなものにして、中には

な建物にそれぞれ人が住んで、
手工業やるのもいいでしょう
し、店舗やるのも料理店もい
いでしょう。

博物館まで含めて、そうい
うきれいな地域にしてしまう。

— 越野氏

いろいろ法規的な問題も現
状ではありませんし、小樽市も
現在運河公園構想というのを
出してるということは、当然
用途地域の指定変更がなけれ
ばできないことですから、基
本的には現行の指定地域を考
えてもしょうがないことなん
だと思います。

あの地域が用途地域に指定
された時から現在まで、ずい
分変わってるはずですし、持
来計画が打ち出されれば、そ
れに応じて当然考えていくこ
とだと思ってるんです。

— 石塚氏

先ほど広田さんの方で、非
常に大胆なご提案があったん
ですけども、広田さんはお
仕事から物をとったり持って
くるのが頭にこびりついてい
ら、しやるんじゃないかとい
う気がするんです。

小島さんの話、梁次郎さん
の話、合わせてすると、修築
とか、あるいは非常に手をか
けてしつかりした形で建物を
再利用するというのは、小樽
にはちょっと見えない人じ
やないかと。

例えば京師の中京郵便局の

話と遊覧船生かろうかがいま
しただけ、あと私の知っている
範囲では大阪中の島で日銀を
やはり同じような形で外壁を
保存するというので大工事
をやっております、何かそ
ういうことがやれるのは、開
拓の村もそうですけども、規
模の大きな京都市とか、大阪
府ですか、あとは北海道であ
るとか、力のあるところがバ
ーンとやるような感じの種類
の再利用じゃないかと思うわ
けです。

小樽の場合は、歴史的な経
緯を含めて、何かこれから新
しい動きを作り出さなければ
いけない。

そういうバイタリティも必
要としている町だと思うんで
すけども、そして財産が歴史
的遺産としてあるわけです
ね。

その中で小島さんのように、
あの手この手を使って、あと
は手弁当で再利用するとか。

そうすると、小樽の今もっ
てる市民の力でも、十分に遺
産を現地で保存する、再利用
するとかできるんじゃない
か。

小樽新聞社の例のような、
修築費用もあわせると坪50万
円以上かかるというのはでき
ないわけですから、現地があ
の手この手を使いつつ、行政
の方にはちょっと片岡ぐらい
でお願いできないか(笑)。

そういう形で一丸としてや

らば、小島さん、梁次郎さん、
あるいはここに出席されてる
方、ひいては小樽の市民の方
々が夢に描いている、小樽は
全国に誇れる遺産を生かした
町だと言えような町が、初
めてできるんじゃないか。

あまり固苦しく考え始め
ると、何か出来ないことずくめ
で、小樽の町に分不相応な考
え方になるんじゃないかなと
いう気がするんです。

— 越野氏

僕も最初に言ったように、
古い建物の保存・再生してい
うのは、ものすごくいろんな
範囲のいろんな考え方があ
って然りなんです。

今のお話しの中で、そうい
ういわばゲリウ的なものでな
ければダメだとおっしゃった
けど、それだけでもないん
です。

一方では、主要な倉庫は指
定文化財にしてきっちり残す
というものが絶対必要だと思
うんです。

全部を同じことでもしようと
思うと全然何にもできない。
いくつかはちやんとやる、い
くつかはゲリウ的にやってい
く、そういういわば多面戦術
を考えた方がいいんだと思う
んです。

— 広田氏

中京郵便局、野幌の開拓の
村、それに明治村にしても、
ずいぶん金がかけてやってる

わけですが、それはもちろんとした後無きやろうと、何か一つ構造的にも安心のいけるものをというのを考えるからそうなるんではないか。

レンガの壁にボンボン穴をあけて窓にしたという、それは今仮に何でもなくても、いつか大きな地震がきた時に、そのことが元になって建物が崩壊するということはない。

それから、結露やすがもりの問題がおこるといのはエネルギーの非常にムダな消費をやっているはずなんです。

そういうことも気にして作るべきだと思ふんです。

建築基準法はオールマイティではありませんけれども、構造的な安全性とか防災上の安全性とかいうものの最低を決めてものを考えてるわけで、そういう精神を忘れることはできない。

手作りは結構だと思ふんですが、キッチンとした建築の指導者のもとに手作りはおやりになるべきだと思ふます。

ことに石造倉庫は、基礎の杭打てるものはもうすっかり腐ってるだろうと思ふます。

構造的にはよく吟味しないと、本当にいつどういことが起こるか。

この冬倒壊したというような危険は、常にはらんでおると考えた方がいいんじゃないか。

— 越野氏

驚くくらいというのが大変な問題なんですけれども、その混り分れ目の一つは、同じようなものも今の技術で全く新しく作った時にかかるお金の比較になると思ふんです。

新しいものを新築した費用と、それにいけば見合うかどうかです。

例えば石造倉庫を使て、マーケットを作る、あるいは展示場を作る。

そういうような時に、一つは新築ということが考えられるわけですが、その新築費用とのつり合いだと思います。

それ以上バカみたいにかかると困る。新築と同じがそれ以下ということであれば、十分可能性が開けてくる。

— 広田氏

さっきのマサチューセッツのあの亭主は、私はどうも異常だと思ふますね。

暖房、電気、水洗便所、そういう衛生器具、排水等を一応整えると、今ですとも万から7万円では常識だと思います。

それをいくら安くせうとしても、4万や5万になったりはいないんじゃないかと思ふます。

そういうことからいうと、アメリカの例は設備費にも着目しているんじゃないかと思ふます。

きつと、今だに眉毛につばを付ける思いで居ます。

— 越野氏

それは僕にも全然わからないうことなんです、それこそ現地へ行て調査してこないとなんか。

— 北村氏

今日のサブテーマに関連して、今まで体験談や制度的なお話、技術的なお話もうかがって来たわけですが、最後にあたって、その課題をこえていたきたいという気がしました。

広田さんでいって、しゃれば野幌であるとか赤レンガであるとか、なぜそういうものを残そうとするのか。残すことに何の意味があるのか。

あるいは、越野さん、広田さん、佐々木さん、小島さんにしても、小樽運河のあの近郊の街並みの良さを評価されるわけですが、それは一体どういう意味の評価なのか。

いけば、その哲学に近いようなもの、そういう部分のものが、経済的、技術的、制度的な制約をどうこえていられるのか。

そこでは、どちらが安い高いという問題だけで決着がつけられる問題なのか、制度の中で何が出来るかということだけの問題なのか、あるいは技術的に難しいからあきらめる、易しい方法を採るという

ことで、建築費が安くなるか、あるいは風景が安くなるかというものを決定して、いっているのか、というところが非常に疑問に思ふわけなんです。

ある面、小島さんの、この建物は人目をひく、名物になるだろうということや、佐々木さんの、自分とはかく好きなんだということにも何らかの争いがかりがあるのかも知れません。

今、世の中、高度経済成長から低成長経済、あるいはひよっとするとゼロ成長経済へ移行しようとしている中で求められているものは、制度的、技術的、経済的課題をこえる何かがあるのか。

それは美意識なのか何なのか、いまだ僕にはよくわからないうことですが、そこいら辺の問題を少しお話しただけらと思ふます。

— 越野氏

おっしゃる理論でいえば、僕の方は遂に誤解してまして、だけれども制度や技術で保存するしないを決定するというふうには全く考えてはいわけてして、保存・再生するための制度にどういうことがありうるか、どういう問題があるかを、まじりさせる。

そういうことが今日のテーマだと僕は了解してるわけなんです。

ただ遂に今の話を聞いていて、少なくとも建築家、いわ

は専門家の側に、例えは技術者
が主で、でも、いくつもある
課題があるんじゃないかと
僕は思っています。

先ほど広田さんの話で、法
規の精神ということをお話され
て、何かやる時にはそういう
ことを考えなくちゃいけない
し、その場合に当然建築家な
り技術者が相談に乗らなくち
やいけない。

そういう時に適確に答えら
れる技術を、一般に建築家は
持っているっていうか、そう
いう技術体系が多少ともでき
てるという状態にはない。

それが、少なくとも技術者
や建築家の側でいえば、問題
になるんじゃないかと思っ
ます。

—小島氏

僕なんかの考え方は、倉庫
を借りよう、どこ借りようか
そこで何もやるかっていうの
が一番大事なわけですよ。

僕は、いい建物はいくらも
にしたいと思えますけども、
何かやりたいってことが一番
大事であって、だから僕は建
物と人とかくらべれば絶対人だ
っていう考え方はありません。

運河の倉庫が1つ残らずなくな
ったって、まあ人間は減
びないっていうか、そういう
考え方でやるとなるとな
ります。

ですから、具体的に何か
借りるっていう話があって、
そういうことを広田さんなり

越野さんなりがしゃべるのは
自然だと思えるんですよ。

そこでそういうふうに関か
れるのは、ちょっとジャンル
が違うんじゃないか。

かえって僕の方が主権者
の方に聞きたいようなことな
らぬよ。

—越野氏

最初におことわりしました
ように、まとまりがどうとい
うか、ないことかとも思います。

今、最後に出たやりとりぐ
らいを主しあたりの結びとい
うことにして、ひとまずこの
辺で閉会にしたいと思います。

第4回 風景の創造

—社会と文化の対話をめざして—

昭和56年6月20日
於小樽市労働会館

講師紹介が終わって、

—花崎氏

ご紹介に預りました花崎景
平です。

私も良く小樽に参ります。
今日も少し早く家を出て、運
河の方を見て、それからここ
に伺った次第です。

小樽運河の問題には、段々
後の方で触れさせて頂きたい
と思います。

少し迅速な所から、私が関
心を持ち続けてきました、人
間の生き方、思想、そういう
所から、お話をさせて頂きた
いと思います。

ドイツ哲学を勉強しま
して、何でも自然観に強い刻
心を以て参りました。

資本主義的な近代の始まる
初期には、自然観についての
せめぎ合い、争いがあったわ
けですよ。

一つは機械論的自然観、例
えば時計じかけのような機械
に自然を見立てて分析し法則
を察見していく、後に隆盛に
なり、近代自然科学を養って
きた自然観。

これに対して、古くさいと
されてきたが、有機的
自然観、生命論的な自然観、有

機的生命体であると捉える自
然観、というのを私は勉強し
てきたんです。

専門的には、18世紀のドイ
ツの啓蒙家でヘルダーという
人がおります。

ヘルダーの思想を勉強して
おりますと、フリマという言
葉で表わされる思想が出てき
ます。

英語でclimat(気候)。フリマ
というは、もう少し広く、風
土とか環境を指します。

ヘルダーはそれを非常に重
視するわけですよ。

人間をつくるのはフリマで
ある。気候を含めた風土性とい
っていいかと思えます。

自然の中に働く有機的な力
である、というのです。

きれいに花が咲く。それは
種の中に予め備わった力があ
って、その力が次第に発揮さ
れて花となって咲くんだ。

宇宙のあらゆる所にそうい
う風な力があって、そういう
自然の内で働く造形力が、
人間をも、被造物の中でもか
ように精巧な、見事な生き物
に仕上げたんだ。

そういう考え方、これは
ドイツの自然観、

晩年ドイツで精神に府かな
一つの考へ方がある。たおげん
す。

自然といふのは、ある神約
な力、人秘神ではないが、神
的な力が働くと、非常に調和
のある物に造り上げられてい
る。

人間の鬼考力もそういうも
のに促ってつくられた。

だから人間は人間性を完成
する事で自然の造形力を讃美
し、そのために働かなければ
ならない。

そういう考え方につなが
っていくわけです。

この思想の中には、人間の
理性と感情、知と情、を切り
離さないで一つの調和したも
りとして見る。人間を丸ごと
見るという考え方があつたよ
うに思います。

その中では、哲学も単に論
理を述べるのではなく、人間の
趣味、美的感覚を大事にし
ておりました。

人間の鬼性、行動、感性、
この三つが、風土の中で生き
る習性、習慣の中と善われ、
その結果として自然に流れ出
てくる快さ、そういうものとし
て「趣味」の重要性を非常
に強調したわけです。

その後、学問の分化と共に
そうした統一性は失われがら
になつてまいります。

ただし、予定調和の鬼考は
世俗化して、読者、筆記者の
嗜好論へと変化してきます。

この鬼考の悪化は、一ゲ...

決して、18と19の世紀を通
ってマルクスへと進んできた
事。

マルクスは自然を私有化す
るマイナス面を非常に鋭く指
摘するわけですが。

対象を私有して初めて所有
の快感を得る。

自然を生活手段として私有
した時に、それじゃ何をも
目的としているか、私有財産を
持つ事自体が目的になっている。

そういう風に私有財産とい
うものは、我々をひどく愚か
にする。

だから、私有化しなくても
所有するという感覚を取り戻
すためには、私有財産を否定
しなければならぬ。という
のが若い頃のマルクスの考え
方ですね。

より高度の所有意識にかん
する事によって、はじめて人間
が完全に解放される。所有か
ら自由になつてはじめて、本
来的な美、感覚を取り戻せる
んじゃないかと。

後には、個人的所有を取り
戻すためにこそ公共の財産は
公共の所有に、と、個人的所
有の持つ意味を再確認する鬼
考へと成熟していくわけが
すけれども、それにしても、基本
的な筋は変わっていない、と
思います。

近代が矛盾を孕んでくる、
それを批判する、そういう個
人の批判の刺戟を、今述べ
たように受け止めて、こうした

有機的・自然観の書述、自然科
学の進歩のせいで見直され
てきています。

一つのミスデムとして環境
を捉えるという考え方には、
明らかに有機的・自然観につな
がるものを持っています。

まあ、そんな事を勉強して
きたわけで、機械論的・自然観
に対する非機械的・自然観の脈
絡を述べてきた、そういう問
題で、環境問題に対する私の
基礎的な関心というのがある
たといえると思えます。

もう一つ、環境問題と係わ
るようになった契機は、現実
との触れ合い、取り分け住民
運動との触れ合いの中で沢山
の事を教わりました。

それは、私が77年に北大を
辞めて、只の浪人になつて、
人生の大転換にぶち当たつた。

40年になる頃ですね。丁度
この22日で50年になつて了う
んですが、私は東京生まれで、
北海道は「飯の宿」という数
もあつたんですが、何となく
北海道に住みたい、で、もう
少しちゃんと見て知りたとい
う気を感じてしまつて、色ん
な所へ行つてみたわけです。

半年ばかり、そうして歩い
ていこううちに、期せずして伊
達で火災の問題にぶつかつて
係わりを持つたわけなんです。

伊達を基軸として考えて、
今度三宅家に人ごとならぬ
火災の持つ事が出来ずし、
水災とか火災とか幾々、皆も

白いままですし、足も進ぶよ
うに歩きました。

まあ、そういう現象との接触
の中で、住民が守ろうとして
いるものと、それを奪えよう
としているものの対立の深
さ、その中に含まれている問
題の重要性、という事を教え
られたわけです。

大体、その二つの流れがあ
つまして、風景という事、と
自分の恩恵なり生き方とを結
びつけて考える、という事を
始めたわけなんです。

風景という言葉は、この小
樽邊河研究講座の中でも何人
かの方が使つたら、しゃいま
すが、私も大事な言葉として
使つています。

私が風景という事に気がつ
き始めたのには、幾つかの素
材があります。

一つは三里塚で、もう十幾
年前ですが、座談会を本にし
た「壊死する風景」という本
がございました。

そこで、20代の三里塚の農
民たちが色んな話をしている
んです。

それは非常に豊かな思想的
契機を含んでいる、丁度この
煙河講座の記録と同じように
面白いものですが、中でもと
りわけ、シマさんという人が
言つてゐる事が大事なんです。

「ここに住みついた何千人
の一切台切が土の下に権力に
よって踏み込まれて、ちやうわ
りたかひな、絶対そうはさせ
ないでとてところが、今の境

を変えている。た一つのもの
のだから「歴史」
空想の歴史の位置づけが、
どうこうというんじゃなくて、
どしどし一つ一つのものだっ
ていう
んぞすね。

「俺等にとって郷土、とい
うのは守るもんじゃねえ。土
地だってそうだ。守るなんて
そんな軽いもんじゃねえ。て
気がするんだよ」
と云うわけだ。

そこには、百姓の恨みがこ
もってるんだ。守るなんてい
えない程に、重たいものが絡
み合、こいるんだ。

このような議論がそこでな
されて、その中で、色んな話
が、例えば、お墓の話が出て
くるんぞす。

「大体、お前、ここならよ
先に天神のお墓が待ってるわ
とかっていう事がある、あの
高い所で見てるわ、とかよ
年寄りがよ、そう云うべ、そ
れもねえもの」

つまり自分達の住んでいる
所にお墓があって、お墓を待
ってるとか、そこで見てると
かぞすね、そういうところに
風景の意味を置いてるんぞ
すね。

「一人の百姓が殺されて
バンザイって、政府のいう歴
史ができる。バンザイ、バン
ザイ、て歴史が流れていく。
政府にとってのバンザイ。歴
史はバンザイしてしまっ
てい

は各々の立場として一極

度が繰り返されていく。
で、一人一人の百姓が全部
揉まれてしまう。
それが絶対に口惜しいんだ
というんぞすね。

「開墾の歴史、百姓の歴史
俺達自身で大事に受け渡して
いってよ、さらに俺自身も、
腹にしっかりと持っていてい
かな
ちゃ」

政治とは、いつもそういう
事を明らかにしないで、そうい
う構図に持って来ると云う
んぞすね。

で、それは対して要議を唱
えたい。

そのような言葉で風景が語
られているわけだ。

で、風景の変わり方にも二つ
あると云うんぞすね「みんな
で開墾して農地にしたら風景
は変わるわけだよ、滑走路が
出来るのと、麦が出来るのと
じゃエライ違いた。空港とか
何とかよ、全然、人間じゃあ
るめえよ。一つの欲が変えた
風景だからな。それと、本当
の人間が変えた風景は違う」

こういう考えに私は大変大
事な事を教えられたように思
います。

で、繰り返しシマさんがい
うのは歴史なんぞすね。

歴史を言うとき、生きてい
る。歴史というものは、そこ
で悩んだり、泣いたり、
罵ったり、それら全部を含ん
だ歴史がある、それが風景
を形作る。いるんだと。

そういう考え方は三島啄

げのものではない。
水俣を石井礼道さんが嘗
めた中で、やはり非常に深
い意味を持つ、たものとして、
風景というものが語られてい
るわけだ。

彼女の言葉で言えば「下層
民」ぞすね。

下層の民が百年位の単位で
ゆうゆうたる歴史の中で生き
ている。

そういう人達の情念が織り
込まれたものとして、水俣の
風景というものが語られてい
るわけだ。

そういうものが一番深い所
で人々の感性を形作る。そう
言ってもいいと思うんぞす。

一番目には、さっき申しま
した伊達の、特に有珠という
沢の漁師達と海との関わり合
い、という所で風景というも
のを大変に自覚させられた。

ここに、有藤ミノルさんと
いう外科のお医者さんがおり
まして、殆んど全生涯を投げ
出すような形で運動をされて
るんぞすけれども、彼の生き
方を、私は、自分の風景を持
った生き方である、という風
に見たわけだ。

自分の風景を持った生き方
というのがあると思うんぞす。
身の回りの、歴史を含んだ
自然や人との接がりを生活の
中に積極的に、自覚的に取り込
んで生きて行く。

自分と他者との境い目が溶
けていって、水がしみ込むよ

うに自分が広がって、いって、
他人とか環境とかに自分の延
長を感得できる生き方。

こういうものこそ、あらま
ほしい、聲がな生き方だと感
ずるように特に、この水俣以
降の10年に、な、たんとす。

もう一つ「風景」を考える
時に、フランスツファン、ア
ルジェリア人ぞすが、彼の思
想「橋の思想」というものも
各地の住民運動の中で、繰り
返し語られ、生かされてきた
思想だったと思います。

そのさわりの部分を読んで
みます。

「一つの橋の建設が、もし
そこに働く人々の意識を響か
せないのなら、橋は建設
されぬ方がよい。

市民は従前通り泳ぐが、渡
し舟にのるかして川を渡れば
よい。

橋は空からぶって落とすも
のであってはならない。

社会の全景に、機械じかけ
の神によって押しつけられる
ものぞあってはならない。

そうではなくて、市民の筋
肉と頭脳から生まれるものだ。
成程おそろくは、技師や建
築家が必要になるだろう。

それも時には一人残らず外
人があるかも知れない。だが
その場合にも、市民の砂漠の
如き頭脳に技術が浸透し、そ
の橋が細部においても全体と
しても市民によって考え直さ
れ、計画され、引き渡されら
るようになるべきなのだ。

争は橋を渡物にすべきなの
の同、この時期の一切が可
能ならば

と云うんですけど、それ
に立上つたのは、

「後述国において重要な事
は白人の人間が考え、決定
する事ではない。

たとえ二倍、三倍の時刻を
かけようとも、全体が理解し
決定する事が重要である事を
経験は証明している。

実際、説明に要した時間、
働くものを人間化するのに失
なわれた時間があるとしても
そういう時間は、ことを成し
遂げる過程で取り戻される筈
だ。

人々は何処へ行くのか、何
故をこへ行くのか、を知らね
ばならない

と書いています。

こういう所に、大衆の政治
化、市民の政治的自覚の次元
を大切にする、彼の思想が表
われていると想います。

アルジェリアは当時、フラ
ンスの植民地だったわけであ
る。

その当時、フランス人には
て居住人は人間じゃなく、
自然の背景の一部にすぎなか
らと彼は云うんですけどね。

植民地支配者にヒッて自然
というものは敵意に満ちたも
のであった。

マラリア蚊。未開墾地。風
土病。こうしたものと同じレ
ベルで居住民を襲っていた。

かかる環境の中で、自然は
敵意に満ちた時に、植民地を
破壊

切すわけでは、

未開墾地である状態。開
地の予感。現地人の原始的経
済の存在。つまり白人は人
間として存在を認められな
いわけだ。

立っている木と同じ、物と
同じ、マラリア蚊と同じ、そ
ういう風にして南極を行なわ
れるのが第三世界の実情です。

それをひっくり返すには、
橋は、橋として便利があるか
ら必要なのではなく、市民が
市民として自らの人間化、に
向かって奉仕する時にのみ橋

は必要なんだ、として、南極
に対する恩徳のひっくり返し
をしたのが、フランツ・ファ
ノンという人です。

「橋の思想」のフランスと
アルジェリアの関係は、実は
明治百年の日本と北海道にも
あったのではないのでしょうか。

先住民たるアイヌの 人々
はフランツ・ファノンのいう非
存在化されて来たのではないか
ったのでしょうか。

そのような思いを、私は非
常に深く持つわけだ。

「橋の思想」は、生涯の願
という事と深く結びついてく
るんですけどね。

どういう生涯が、人間化さ
れた生涯と云えるのか、ただ
利便性が効用とかを懸える視
点、価値観があるんだという
事も致意してくれている、と想
うわけだ。

こうして「橋」 という
ものを考える、これは、

な事をやってきました。

伊達火葬の強行着工の時、
機動隊がきて、ブルドーザー
がニラ畑を掘り起こしていく。

それを、そこに長年住ん
だアイヌの人達は、自分の
皮膚をかきむしられる、そん
な痛ましきで受け止めている
んですけどね。

そういう事に感銘を受けた
事もあります。

伊達火葬の運動の中で、電
気料金の一部不払いの運動を
札幌でやりまして、暫く電氣
を停められた事もあります。

電氣のない生涯をする、こ
れは或る意味で非常にいい経
験でした。

というのは、共に困る仲間
というのが見えてくるんです。

そこで一戸毎の生涯の碎が
外れて、生涯の交流が深ま
てくるんですけどね。

それに便利さが減るとい
う事は、その分、生涯にける
労働時間が増える事だ、そん
な事も分かってくる。

洗濯機を使えないという事
は、自分の手で洗わなければ
ならないという事ですけどね。

そういう事が見えて来る中
で、身体の問題、食物の問題
そういう身近な問題にも関心
が深まっていき、より敏感に
なっていくわけだ。

で、マッサージャ、針を覚
えたり、お産も自分達の仲間
で学習して、自分達の手で産
む。

そういう共同性が聞けて、

る。

少数ですけども、そうい
う事がやれてくる。

五年、札幌で少数のグルー
プですけど、小さな集りをや
りました。

その中で「地域」に対する
関心が非常に深まって来たん
です。

仲間が議論している一人
が云うんです。

「札幌なんて地域といえる
のか。近代化され拡散してし
まって。到底まとまりを持っ
て自分達が生きる地域とは思
えない。」

それに対して「いや、我々
は地域になるんだ。地域とは
手えられてそこに在るとい
うものではない。すぐれて人と
人との関係の中に生まれるも
のなんだ。そういう関係を作
り出していく、我々は地域に
なる、という事が大事だ」

という議論が出てくるわけ
です。

そういう意味で私は、風景
を作る、という事はすぐれて
人の問題であろう、と考えて
おります。

私は思うんですけども、
豊かな生き方というのは、良
い反省を持つ事だと。

しかもそれが、相手の死水
をとるか、そいつに葬式を出
してもらおうか、という事ま
じ含まれつき合いをするた
んには、或る種の定義性とい
うようなものが、受け出しが
ないと思ふんです。

それから、世代間をどうやって受け渡していくか、また伝統とか文化の問題に結びつくと思うんです。

それは、今の、小樽の運河と石造倉庫群を保存しようという運動、これは過去10年程を通しての、切実な、非常に大争な運動だと思いますが、もし仮に、今の人達によって守られたとしても、受け継ぐ世代が齊になかったら、今だけの保存で終わってしまいました。

そういう意味で、世代間をどう受け渡していくか。

そういう点つ、人のつながりの中で、「風景の創造」が考えられなければならないという風に考えています。

先日来、この小樽運河の保存運動の資料を読んで参りました。

感じた事は、住民運動と科学との関わり、という問題で、ここには非常に示唆されるものが多いなと思いました。

運河と石造倉庫群を守る住民運動が起きて、それを自分達のものにするために色々な角度から援えがえそうとする。

一つの地域の、非常に個性を持った奥地がある。その個性とは何か。それを支えてきた歴史とは。と、具体的に色々な角度から光を当てて。

その場合、科学と住民運動がどう関わり方というものには、二つのやり方があると思えます。

一つは、科学的知識を援えて、それを自分達に受け渡すというやり方。

もう一つは、科学する営みそのものが小樽運河との関わりの中で変化を余儀なくされるという風なやり方、この二つがあると思うんです。

どき合いの科学で済ませるという方は、特殊、具体的な事例をもう一般的法則に帰納させて了う、あくまで科学のパラダイムは変えない。

具体的な接近の仕方としては、新しい義徳を実験して、それを己れの業績にするとか、それを己れの研究論文の材料にするために、そういう形が関わってくる。

頂いた資料の中の、北大飯田研究室の「小樽運河とその周辺地区環境整備構想」を拜見して、たいぶ笑って了ったんですが、こういうものは見ていて恥かしいんです。

自分の側が変わる契機を徹座も持たないやり方。

コンサルタントのやり方です。

そうではないやり方というのは、小樽運河なり、石造倉庫群、或いは、地産というものを生かすために、自分の持つ、部分的知、を注ぎ込んで肥やしにするようなやり方。

そこでそれを守ろうとする人達の肥やしになる、そこに天啓を持って、染み込んでいく、そういう営みで知が伝わる。

そういう営みで知が伝わる。

と科学が結びつく時には、具体的な事柄の持つ深さを掘り下げる事も出来るし、また新しい学問の在り方を示唆すると思うんです。

知の在り方というものの二つのタイプを、フランスの人類学者のレヴィ・ストロースという人が云ってるんです。

一つは、一般的な法則を発見する科学的な知の在り方。

もう一つは、先住民が持っている神話、ストーリーという形で存在する知。

現代文明社会でいえば、機械工業生産のようなやり方と田舎大工であるような器用仕事という風に、レヴィ・ストロースは云ってるわけですが。

あり合わせの材料を使って自分に必要なものをそこで作る、予の器用さを生かして。

そういうものとして知が活用されるやり方が、ずーっと長い歴史の中にあって、それが我々の感性の基礎を形成する。

そういうものとしてもう一つの知がある、という考え方も思っています。

そういう知の在り方というものが、分析-迎刺の西欧科学のこれまでの在り方への反省として出てきています。

住民が運動を始めて、科学が必要とされる時には、そういう知、そういう科学が必要とされるんです。

そういうものの一つの実例がこの運河研究講座の中で、

様々な形が実験され始めている、と感じました。

そんな風に住民運動というのは、一つの具体的な目標を持ちながら、そこから、より深い文化、文明の問題にまで派生していく、という事が幾つかの例を通して、私の強調したい所なんです。

その視点から捉え直すと、小樽の運動にも問題点はまだ含まれている。

市側とのコミュニケーションができない。運動の側からいえば理事者を説得することが難しい、という事が再三いわれております。

何故できないか。

そこには、一朝一夕には改まらない歴史的な格組みが、あって、住民と行政との関係が規定されているんじゃないかと思うんです。

北海道開拓百年といわれるわけですが、内国植民地としての歴史、経済的な収奪を行なう場所としての北海道、先住民のアイヌの人々も収奪すべき資源の一部ではないわけが。

そこには市民社会なり、そこに根ざした文化の蓄積というものが非常に薄い、という事がいえると思うんです。

それが、開港のイデオロギ-に対して、威嚇をもって控え得るものになってない。

そして、そういう伝統というものを継承するならば、先住民のアイヌの人々の文

化、それを切斷してきた事、
そういう事にも朝っていかね
なければならぬ。

今は風景の擁護者たらんと
しているわけですが、先住民
にとっての風景の破壊者でも
ある、そういう重層的な構造
がやはりあるのではなからう
か。

そうした時は、何故、小樽
運河を保存するのか、という問
いかけに、謙虚で、それ故に
説得力のある掘り起こしがで
きるのではないだろうかと思
います。

そうした事も踏まえたい
で、やはりだけでも守りたい、
つまり僕は運河が壊されて、
あそこには大車線の濶い道路が
できる事に絶対反対です。

保存したい。
何故、そういっても良いの
だろうか、そこを考えてみた
いんです。

言葉にすると軽くなってし
うんですが、人間の創り出し
た美があそこに感じられる、
と思うんです。

建築当時にそういう美を感
じたかという、ちょっと違
うと思ひますが、経済的な効
用から相対的に自由になった
と云いますか、ちょっと距離
が出てきた。

それは、時代遅れになった
という事を持つもう一つの意
味ですが、そういう事がそれ
を美と感じさせる一つの契機
になってるんだ、と思うん

です。

ブルーノ・タウトが「美とは
目的のない合目的性である」
と云っているんですが、つま
り、直接の目的はない、しか
しそこにはある目的があつて
統一されている、そういう感
じを人間に与えるものが美だ
あるという事ですが、そうい
う事は確かにある、と思うん
です。

それから、これも大事な事
だと思ひますが、果して、
札幌の駅前通りのビルが古く
なったら美になるだろうか。

どうもそうはならないの
ではないか。

そこには、手づくりの味わ
いといひますが、素材に対し
て人間の加工が從属している
関係、それが人間に親しみを
感じさせ、美を感じさせるの
ではないだろうか。

それは、その当時、石炭倉
庫をどんどん作らなければな
らないので、手に入り易い札
帳板石を使った、という或る
限定されたあり合わせ性がで
すね、かえって我々にとって
の趣味を満足させるものにな
っているのではないかと、思
うんです。

それから、ある事物が凌着
の対象になるためには、どう
やら、三世代という時間の琉
れが必要なのではないでしょ
うか。

初代はそれを直接の効用の
ために使う。

二代目はそこから脱却した

い、否定した いわけですよ。

三代目というのは、自分の
直接前の世代を否定して、初
代に対して自己同一性を感じる
気持ちになり易い。

そういう意味で、今の時代
というのは、小樽の倉庫群に
とって、それを守るといふ意
識を我々にひき起こすような
そういう役割を持っていると
思うんです。

そのところにやっぱり歴
史を負う、という事が関わ
ているように思ひます。

あちこち、少し浅くなが
た話になつてしまいましたが、
色んな地域へ行つたり、そこ
での人の生き方から学んだり
して思ふ事は、こういう運動
にとって、当り前の事ですが
本当に大事なものは、人だとい
う事です。

市民として共同の社会をこ
の小樽で築き、伝えていく、
という地の上で、はじめて運
河を保存するという模様が導
かびよってくるわけですよ。

そういう人たちのためにな
ければ、観光用というの、
飽きられる。

女の珍しく思われて、無責
任に「いいね」といわれて、
飽きて捨てられる、そういう
ものではない、と思ひます。

だから、歴史を負つて伝統
を創りながら生きようとする
人々がある限りにおいて、風
景というのには生きまんだ、と
思ひわけです。

そのために必要だ、と今、

私が考えていますのは、私の
契機です。

自分たちが根を下すという
事と同じ位の重要さを持つて、
旅をする。

これが、自分の地域をもう
一辺、価値として捉え直す契
機になるわけですよ。

あちこちへ行つて人と出会
い、形のない蓄積を体につけ
て帰つてくる、そういう事が
自分達の場の運動が豊かなも
のになります。

自分達の市民の社会を創り
上げていく、その中心には友
達関係を充実させるという事
をすすめて、そういうものとし
て地域を創り、自分の風景を
持った生き方を目標したい。

だいたい、そんなような事
を考えております。

— 司会

どうも有難うございました。
今のお話しで何かご質問、
ご意見などございましたら、
まだ40分程、時間がございます
ので。

— 北村氏

運河を守る運動を、かれこ
れ4年間やってきたわけですよ
が、僕自身の中でよく整理ど
きな問題として、運河は一
体、他者なのか、という風な
事があるわけですよ。

運河への発言権、正統な發
言権を持つ要件としては、一
般には、そこに居住、或いは
勤務する人、というのが狭い
方だ、広くみても、小樽市民
といった事が云われませんが、

果してそうだとすれば、ほとんど物理的根拠の付随に減少化されてしまう、そういうものではない所に極端の根拠を待ちたい、という間違った運河を単なる対象物以上の物として捉えなければならぬのでは、と思うわけです。

また、感性を基盤とするならば、それをどうして運河講座を開くという風にロジックの世界で展開していく事との間に本来的な矛盾があるのではないかと考えます。

又、今のお話しにありましたように、運動では人が大事である、それは分るんですが運河をそれ自体の尊厳といったのも、人間の怒意を討れるのか、といった疑問もあるわけです。

—花崎氏

榮谷憲宏さんという、もう長いことオーストラリアに住んでいらっしゃる方が、日本にたまたま帰ってきた時に「自分は10何年来オーストラリアに住んできて、今では、オーストラリアの自然に所有された、という感じですよ」と云っていらんだ。

そういう感覚ってというのがあると思うんです。

自分が運河に所有される、客体化する以前にそういう感覚があって、それが基礎になるのではないのでしょうか。

マルフスが面白い事を云っています。自然は人間の非有機的な肉體である、というん

でいい。非有機的な肉體という言葉がマルフスが表現しようとした何か、これは榮谷氏の感覚と非常に近いような気がします。そういう感覚が、本来、人間の基盤にあったのに、近代の開発の進心と共に、消え失なわれていく。

ある人が、「今、住民運動が盛んで、伝統文化の保存が叫ばれているのは、開発によって単に地域が変わるだけではなくて、民衆が生きてきた基盤の文化が変えられつつあって、そこで生きてきた自分が壊されてしまうという危機感があるからだよ」と云われていました。

僕もそう思います。

ですから、極端にいうと運河はあなた自身だ、という感覚を積極的に取り戻す、という風に云えると思います。

それを大事にしながら、論理化するという所では、即自的なものをもう一度自覚された形で取り戻す事にならないかと考えますか。

—北村氏

感性で捉えたものを論理化する、本当にそうならば良いのですが、論理の演算に適する部位だけを捉えてしまっただけを全体と認識してしまう結果になるのではないかと。

単なる概念の意味は科学的知識よりも高く全体を捉え得るかも知れない。が、晴れた場ではそれを待ち出せないが為に

また、論理の境界に頼ろうとする、そういう不安なのですか。—花崎氏

これは、完全に答える事はできませんが、説得とは何かという問題かと怒ります。

一番良い説得というのとは、理屈で負かす事ではなく「あいつの云ってる事は、俺が前から感じていた事と同じなんだ」という気持ちで動く時、相手の心の琴線にふれる、という事だと思います。

そういう、情と理の両方備わった説得の言葉というものを、住民運動は獲得しなければならぬと切実に思います。

そうやって始めて、文化をも踏まえた論理になる、と思います。

—全場から

先生のお話の住民運動の例では1次産業者が多いように思いますが、小樽では都市住民なわけですか。

—花崎氏

我々のこれからの都市社会での結びつき、市民的な連帯のあり方というのは、各口は多様な、いわば個に環えされが、かかっている若連が共同の場を創出する。

共同して何かをやる事によってお互いに浸透し合える関係をつくる、という。

それから長ん社会を目的意識的に都市の場をつくる、という事もあると思います。

これは、都市の場をつくる、という事もあると思います。

流るるべて運河につながるように出来たわけでは、

それは極端な方向の道路にふって分断されるダメージというものは非常に大きいんですね。

道路を造るよりも、木口が合った方がよい、という事は誰にでも感じられる事だと僕は思うんです。

ああいう場所に花なんか咲いて、人が楽しそうにしたりしてると、オーアンスペースで誰も邪魔しないわけですから、人は行くわけですよ。

現にあそこ人が集まり得る、休み得る場所だ、って事を漸く、まわりの人も分ってくれば始めているわけです。

でも、市が道路を造るのにも理屈があるわけですよ。

もちろん、市の議論の道筋と、僕らの感性の道筋とは全然ちがうわけですよ。

ただ僕は、これが全然が合わないわけじゃない絶対はないと思うんです。

で、僕らは、彼らの土俵に入っていく事によって、彼らの論理をくつがえそう、という事を始めたわけですよ。

例えば僕らは運河は小樽の重要な観光資源だと主張しています。

それから、港を中心とした経済だけではなく小樽を救う道にはならない、という事も主張してきたんです。そういう事を、

彼らも、聞いてくれている、という事もあると思います。

か出てくるわけがね。

近い将来の行政組織があるのだから、近い町並みは、少ないとも僅ら、心が空まると思うし、一般的にもそういうものの価値は云われているわけがね。

そういう価値が現に片方にある、しかも金銭的価値にも置き換え可能なんぞ。

住民と行政が一体となって向こう20年、30年を長期的に選ぶとすると考えれば、僕は小樽、でそういう試行錯誤をやり得る町並と思うんぞ。

— 花崎氏

そうぞすね、そういう可能性は10年前よりは、ずっと拡大してきていると思えます。

南極する経済の論理というのは非常に短期的な視野しかもっていないんぞ。

経済を年率7%ずつ上げていくと10年で倍になるんぞすね。つまり10年たつと投資した固定資本を減価償却して更新できるんぞすね。

だから南極する例にとってば、10年毎に風景をすっかり変えていくのが、一番効率が良いんぞすね。

結果がどうか別にして、10年単位で、設備を更新するよ様な発想しかできないわけがね。

だから、今の方の云われに長期的視野の中で、経済をも念頭に置いていかなければならぬ。

— 中山氏

今、そういう事が出来る事は無いが、近いうちには出来るかも知れない。

— 中山氏

今の発音にあった、感性の道筋と、もう一つの道筋の問題なんぞだが、そもそも基礎の違うものではないけれど、上手く合意形成に導く方法というのにはあるのじゃないか。

— 花崎氏

とても難しい、僕は成功した例は知りません。

しわ中る都市の議会制民主主義の中で上手く行く方法というのは良く分らないし、身も染んでいかない。

難しい問題ぞすね。

— 司会

本日はどうも有難うございました。

第6回 地域での試み

— 小樽を生きる場として —

講師 浅原千代治氏
近々木謙二氏
藤巻孝一郎氏
渡辺真一郎氏
中山和夫氏

昭和56年6月25日
小樽市労働会館

講師紹介が終わって

— 中山氏

今年の冬は何十年振りかの雪だったということなんぞだけれど、その時に小樽の街を私なりに撮ってみたり（これがこれから上映する）映画です。非常にイメージ的な部分が多いのですが、ひとつ見ただけだからと思います。

それで、今回運河講座という事で、運河もちらちら出てきますし、よく見ただけじゃないのは、港とのオーバーラップになっているところだ。昔、現在石造倉庫群になっているところが直接の港だったという過去があるということをお聞きしました。が、そのあたりを見ていただけたら、昔の繁栄、今の繁栄ということじゃなくて、ひとつの残す意識があるんじゃないかなと思うものですから、そのあたりを注意深く見ていただけたらと思います。

◎映画「タッチミー」(中山和夫氏制作)上映。

10分

— 浅原氏

とっ始めというのは、なかなか話にくいぞすね。それに生まれ育ってずっと大阪に住んでいたもんですから、おとし小樽にきたんですが、言葉が大阪弁が標準語だという感じがしやべりますので、わからへん場合は後で通訳しますんでご質問くださいばと思います。

小樽におとし来たんですが、いろんな人に聞かれることは、なんであんな北海道に来たんですか、とか何でまた北海道の中の小樽を選んだんですかとか、よう聞かれるんですが、ごっくばらん申上げますと、まず夢があったんです。どんな夢かと申しますと、ぼくは大阪にずっと住んでたんで、ガラスを始めたのも大阪なんです。というの私は生まれながらのガラス屋として育ったわけなんぞすが大阪というところは大阪らしいところか、夏だと30センチの雨が降るわけが昔は

編者がもうかるように、何か
出来るんやないかとぼくは考
えていたわけだ。

それと、もうひとつなんでも
書ければ、札幌に飲食専門
学校、専修学校というもんが来
年かさ来年に開校の予定なん
です。その専修学校の中にガ
ラスエ芸というものをひとつ
入れようやないかという話が
ありましてぼくのところにも
話がきているんですよ。それ
は悲しいかな札幌に本校を置
くんですけれども、ぼくはそ
の部分、学校のガラスエ芸科
というものを小樽に引っ張っ
てこようかな、と思ったりも
したわけだ。

そういうものをつけ加えて
小樽の良さをいふんなら人た
ちに理解してもらおうやない
かと思ひます。

力が及ばないんですけれど
も、回がご招待して下さいま
す近代美術館とか展覧会の時
には、できるだけ小樽の話や
北海道の話と長くつけ加えま
してやってみようかなと思ひ
ます。

もうサレミなさん共々、小
樽を認識していきながら、い
ろんな方々に知っていただき
たいと思ひます。

一落 終

ぼくと申します。
私がこの小樽の街にかかわ
りをもったのは、11年前に
札幌を去るから、札幌に
送られたもので、札幌に
送られたもので、札幌に

送られて子供ができて、あま
りのパターンで小樽に定住
ことになったわけだ。日本
中いろいろ住んでみましたけ
ど、この街に住みやすい街だ
し、というところだ。

運河と直接つながるかどう
かわかりませんが、7月7日
に私、店を開けるつもりです
から、私の店、たは分はなま
べく私の店の宣伝に費したい。
ぼくの留学していたヨーロ
ッパというのは、小さい国の
連合のようなものでして、日
本で言えば、フランス、イ
ギリス、イタリアのよう
なよそ集めなんですね。地理
的にすごく近いんです。そう
いう街々をぼくのような、あま
り銭のない人間が放浪したレ
まして、ちよっとした街々の
おもしろいものを見たんだ、
と思ひます。

それで超高級ホテルのレス
トランには入れないので、ふ
つうの、街のレストランに入
るわけだ。

そこに入って食べますと、
日本で意識しているような
レストランのメニューはない
んですね。まあ、スパゲティ
とかハンバーグとかがありま
して、あとは何もない。
そういうレストランは殆ど
ないです。向こうのレストラン
で酒を飲む、ワインを
飲むの土地のいい酒の歴史を
書いたスパゲティと、という
が、送られたもので、札幌に
送られたもので、札幌に

これが、という感じではなくて、
自然発生的な感じだ。こもや
ていまして、

ぼくはもういう店をつくっ
てみたい、と思ひます。
それで7月に、店の準備を
するに当たっていろいろ考
え、たわけだ。思ひます。
帰ってきたと、思ひます。
ですが、北大の越野先生の書
いた新聞のコラムを読みまし
た。読んだ限りでは、石造り
の倉庫群というの、簡単に使
えるように書いてありました
が、あ、ちこち当たってみ
ましたけれど、とても高いん
です。

私、そんなにお金の用意が
ないんです。土地付きで億だ
とか、せいぜい9000万円です
ね。そういう物件ばかりなの
で、これじゃレストランでき
ないなと。

それで、私はすぐに始める
つもりでしたので、もう一
つ方向で、最初の夢は半分
から捨てて、街のまん中を
やろうと思ひました。

今、花園銀座街に48坪の場
所を確保しました。店の特徴
キッシュフレーズを一言で言
うと「又流の本物」というか、
又流とは何をさすのかという
と、マキシム・ド・パリだ
か、なんとかいう、食べると
はもう3万もするようなメ
ニュー体系はとらない。あく
も普通の店の値段と
しよと。人争なことは、レス

トランの経営者が、優秀材料
を自分の調理するという理
をつくらなくてははいけない。

店を出るものは全部をつく
る、そのへんのレストランで
やってみよう、と、思ひます。
ハンバーグ買ってきて、でき
あいのデミソースかけて、ど
あいのつけものを添えて、最
後はできあいのアイスクリー
ムを添えて、そういうことじゃ
おもしろくない。

それからもう一、特徴を言
いますと、ワインです。

私は北海道ワイン時代に、
ぶどうがくりから始めたんで
す。実際に工場をワインをつ
くってラベルをつくって、貼
ってというところまで習いま
したんで、できたらそのワイ
ンを売りたいと考へたんです。

さらには、せつかくの小樽
のワインですから、みなさん
に安く供給したいと、思ひま
す。終わったワインビンでも
かかりますし、どうしても高
くなるんです。

でもから、グラスで飲める
ように「樽輸送」というんで
すが、18号の大きな樽を輸
送して、すべてワインボトル
ヤーがワイングラスを直接
運んでくれるんです。それ
と、酒屋さんでビンを買って
飲めば、もういい。

向こうのレストランはど
でもありますが、飲みもの
は、酒屋さんで買ってきた
もので、思ひます。

安く安く提供するのは、

レストランの住居だと思ひま

す。オープンの時は重伝もかぬ

まして、コックにスペイン人

をよんでワイワイやろうと思

っています。皆さんの真摯な運動をばく

はよくわからぬ測面もあり

ますが、ぼくはやはり、市民

運動というのは、こんなふう

にみんなワイワイやるという

か、もしもせんが、みんな

——渡辺氏

渡辺です。先ほど版画協会の事務局

長というように紹介されました

が、版画協会というのは戦後

すぐにできました、今、金子

誠二さんが中心になってすす

めている組織です。去年、小樽版画協会という

名前を活動をした時に、金

子さんから青年となんかつけ

ないで、同じ版画をやっている

というのが正解のよう

な気がするのです。作品を作

っている方はそれ

をそれとしようと思ひます

と、場所よりも自分が何を

やろうかとしようと思ひます

そういふ初め共同のアトリ

エを今年の4月に借りまして

をここで個人でできる大きな

作品とひをみんなで時間を

やりくりして廻りたいと思っ

ています。やはり、場所が

ひきるとそれなりに活動の

場を借りアトリエに

にして、又階は今、人が住ん

でいるんだけれど、東証照明の

写真屋の事務局の一部に

使われたいと思います

今、7人います、ほとんど

が20代の後半なんですよ

これから小樽に来てから初

めてシルクも知りまして、興

味を持って、それから付き合

って作っているのをそれと

し、それから小樽にやってくる

ことに關しては、とりたてて

この小樽という場所に意味を

見つけているというよりは

ます。

小樽の歴史とリウ歴史が
30年あるような名前を看板
にしてしまうと、それなりに
大変だと思ふ時もあるので
すけれども、金子さんとかが、
一原さんとかが自由にやりな
さいとかなり暖い目で見たく
れていますので、八方やぶれ
になるかもしれないけれど、面
白くやりたいなと思つていま
す。

7月に美術館の空間を一つ
作って行って、それが一つの
作品になればということと考
えています。

ぼく自身のことでは、地に
上映企画をやっています。小樽
の中で自主制作映画を発表
する場を作っていましたと思
っています。

今のところ2カ月に1回く
らいいんですが、8ミリ、16
ミリ、ほとんど劇場でやるこ
とはないのですねけれども、そ
ういう、ほとんど作家という
のは、東京が中心なんですけ
ども、そういう8ミリ、16ミ
リの作品を作っている方の作
品と上映しているんですね。

映画というのは観て楽しむ
という感覚がかなり日常化し
ているのですが、観るのと同
様に、作る、なおかつ批判を、
批評するという三位一体がや
はり、本当の映画のスタイル
なんじゃないかな、と思いま
す。

小樽の同人の映画をつく
っていき方が出ている

し、そういう意味でも、そ
のなかから小樽の歴史を映
画で表せることを、今期待し
ています。ぼくは発表の場を
つくること、今のところ位
結構じゃなかなかと。

あまり観たことがないから
関心がないのが、札幌の10分
の1ぐらいしか、動員数があ
らないのですが、映画館を
映画とテレビとか、またち
がった感覚をもった方がたく
さんいらっしゃると思います。札
幌なんかも、作品を作る人
が出てきましたので、ぜひ何
かの機会に、自主制作映画と
いうものをこぞ観になってほし
いなと思つています。

——佐々木氏
佐々木です。

小樽に現代美術館を作ら
うじゃないか、という、まあ
いろいろ友だちとも話し合っ
たんですけども、いかに突
拍子がなれないことでした。

美術館というのは、普通、
公の機関がつくるというのが
普通で、日本の場合、私立の
美術館の場合、よほどの金持
たにえは石橋正之などのよう
に、あるいは、県立美術館、
郡立美術館のような公立の大
きな組織がつくることか。

我々が小樽に使用、主体的
に動いて、はたしてそのよう
な美術館を作ることが可能か
どうか、すいぶん前から考
えておりました。

美術館を作るためにいろいろ

る条件を考えたときに、基
本的には4つあるのではな
いかと思つています。

新たに美術館を作るという
ことになると、それだけのも
え、30億かかってしまうので
個人的にはとてもできない。
すでにある建物を美術館に転
用できないか。

私は最初、札幌を考えて
いたのですが、札幌には無理
で、友だちである、小樽在住
の彫刻家である佐渡さんの方
から小樽にいい建物がある。
もし使えたら、間接的に我々
のことも見せてもらつたん
ですね。

私達が収まっているのは「
大家倉庫」なんです。建物
自体、美術館として機能を持
てるような規模を持ってい
る。

簡単に建物を借りるとい
うことができると思われない
んですが、最初は冗談で我々が
借りることができないか話
したんです。

よくよく話をすると、今年
か来年あたり、営業倉庫とし
ては使えなくなるというこ
とを聞いたもんですから、大
家さんと交渉してみたわけ
です。

あそこにはパイプスが入ると
倉庫として機能しなくなると
大家さんも言っていました。
いろいろ問題もありまして
簡単にはいけません。建物と
しては美術館に適しているの
ではないかと思つたんですが、

純に建物だけを確保したら
いいのに、その間にできるとい
うものでもない。やはり作品の収
集、保存というものが問題に
なる。

それから美術館の維持・管
理、誰がいったいやるのか、
そういう人員も確保しなければ
ならない。我々は美術家であ
るけれど維持・管理の方ま
ではなかなかできない。

せつかく作っても1年、2
年でだめになってしまふよう
だと、何のために美術館を作
ったのかわからなくなる。
そのための美術館を維持し
ていくための資金の問題もあ
りますし。

それらの条件をクリアし
なければ美術館をつくること
はできない。

その他に細かい条件として
は、法律的な問題があります。
現在あのへんは公共地域にな
って、法律条例からも美術館
としては使えない。そのよう
なものに転用してはいけない
ことになっていて、そのへん
の改正をやってもいいわけ
はならないわけですね。

まあいろいろ見てまわった
んですが、小樽倉庫とか大家
倉庫のような倉庫はなまじり
かんと思ふわけですね。

小樽倉庫の場合、大きすぎ
てちょっと無理なんじゃない
か、大家倉庫の場合800坪と
いうことで、道立近代美術館
の3分の1か半分くらいあり
まして、我々がやっていくに

ものを作っていくときに、
たしかにつくりやすさは、
つくりにくい環境があって小
樽はつくりやすさと思ひます
が。

—会場から石原氏

せっかく小樽の建物がある
のに。運河の倉庫も活かすっ
ていうのも同じように活かす
ことができないのかな。
あれば、うかがいたい。

—会場から

次にうたっていいですか。
浅原先生にお聞きしたいん
ですが、さっきのクラフトセ
ンターの3億円の話をお話し
してくれませんか。

—浅原氏

ぼく、正直に言いますと、
小樽に来た目的というところ、も
う6年前に小樽を初めて知っ
たんですけれども、運河の倉
庫がガラス工場をしたらどや
という話があったんです。

実際に此の人が調査にあ
たって下さって、フタバ倉庫
とかいろんなところを見たん
です。なんでもなかったかヒ
いうと同じことなんです。み
んな。非常に高かったという
こともあります。そして場所
が広すぎるということもあり
ます。

それで今、正直に思ひん
ですけど、堂位保樹が考え
ると、おとらくがスエ・スタ
ジオは建つてから、運河に

あ、あ方が、ともうかた
た、あ。

同じ建つてはいるのかとい
うと、本当に運河の倉庫を
がうスエ工場に利用して、運
河のためにいいのかどうか
これは住んでみて初めてわか
ったんです。

運河をみなさん方が残さう
と、倉庫を何とかしようとい
うて、あつては、じゃあ逆
の質問ができればですね、ど
ういった形を残すのかとい
うことですね。

ぼくは、やはり失人たちが
血と汗の結晶として、あま
う運河をつくり、小樽の街が
栄えてきたということが非常
に貴重な財産だと思ひます。
みんなにつぶすこともない
と思ひます。だけれどもそれを
利用して何かせえといわれ
て、それが果して運河のため
になるのか、倉庫のためにな
るのかっていうところがど
ういふ感じがするんです。

さっき話したクラフト
センターの話なんですか
も、正直言って、さつと流
した程度の話なんです。

まったく何にもあれから
回だけ念合がありまして、皆
さん方のご意見を伺いたい
ということにして。ぼくも出席
させていただいて、クラフト
センター設案の下書きをし
ました。

実際にぼくがしたい話とい
うのは、エリアとして考える
んが、

小樽のまらもエリアなん
です。場所だけじゃないと思
ひます。

そこには公園もあり、
1階はギャラリーにしたり、
2階は集会場のようなもの
をつくり、3階は文化施設の
ようなものをつくって、など、
まあ考えています。

これは一つの考え方なん
ですが、中心にひとつの円形
のものをつくりたいと思ひ
ます。

ギャラリーが1階の、2階
はひとつの通路でもあり、3
階にもって行くのはもうサ
ラ大きな、いろんな人が集
まることが出来る部屋をもち
たい。4階は宿泊室にしたい
んです。6階ぐらいには、展
望台兼レストランと思ひん
ますね。

箱根に「彫刻の森美術館」
というのがあるんですけど、
そんなふうな感じのエリア
として。

小樽の運河とか倉庫群とか
いうものを、ほんとく手はな
いと思ひます。あれはあれが
お客さんをひきつける要素
があると思ひ、あのままひ
ききたという感じがします。

それだとえは港のところに
美術館がひきたり、レスト
ランがひきたりいうような
ことになっていけば、そこから
繁華街をこえて天狗山まで
お客をゾロゾロ——という
ようにぼくは考えています。

こまごまの構想の話とあ
ると建設所の人たちはギョッ
と

驚いて、国からの金じゃな
いというところになるん
でみんなより大きくはしな
かっただけですね。

まあ、そんなふうなことを
考えています。

—司会

中山さんにお伺いしたいん
ですけれども、さきほど上
映して下った映画のことなん
ですが、小樽運河の映画と
すると思ひました。まっか
けは何かあったんですか。

—中山氏

ぼくの場合、最初は映画を
とるといふことではなくて、
何度か小樽に来まして、ス
チール写真をとったんです
けれども、あんなドブ
のように臭いようなところ
でも、油が、たりと反射する
と写ったとききれいなんで
すよね。このことにちよと
びっくりしました。

これをもっとみんなに知
てもらえる方法がないんだ
ろうかということもまっか
けになったわけです。

遠くからでも運河を写し
に来る人がかなりいるん
です。たまたま地元のところ
で映画をとる機会があった
から、とり始めたわけ
です。もっとふれてほしい
ということもあって、あ
のタイトルをつけて
あげて、もっと知ってほ
しいということですね。

札幌の昔、メカネ屋さん
た

った新が、今ビュ-ティカロ
ンに成ってる人びと。
これは倉庫を改造して、中
を真っ白くしてディスプレイを
かけているわけですよ。音が
もれないうこと、やはり
駅名というものの良さを消
かしているという気がしまし
た。

さきほどの渡辺さんも言っ
てくれたんですが、倉庫を利用
するんだったら、ちやうど中
がま、暗いからぬ。四六時
中映画をやっている人じゃ
ないかな。

さっき、値段が高いとか言
ってました。なんともやれ
るものなら小樽の文化的な面
を根拠せたら、というのがぼ
くの夢です。

—会場から峰山氏

ありがとうございました。
私、なかなか皆さんとお会
いする機会がなかったのび、
今日はすごく力強く感じたん
です。

もう何年前になりませうけ
れど、運河や倉庫の再生につ
いて考えたんです。

まず美術館にしたらどうか
とか、ガラス工芸をやったら
どうかとか、食べものセンタ
ーみたいなにしたらどうかと
か、樺太館にしたらどうかと
か、郷土館にしたらどうかと
か、そんなことを考えたん
です。何年前に。

思うしたら、みなさんの中
から、同じような話が起る

きましたのび、時間をかけ
て中をこういう話がある
たというのび、素晴らしいこと
だと思いました。

動きが起るまでにはどう
も可能性は一つ近づいたとい
うことではないかと思うん
です。

美術館はあそこにもしまし
たけど、倉庫の中におきたら
良かったんですね。

今日は非常に具体的な提案
がありましたのび、やはりそ
れを踏み台にしてそれをどう
市民に訴えて突らせていく方
法をみなさん考えていきな
いと思ひます。

一つ成功させたい。それが
派生していくんだという気が
しますよ。

どう具体化させるかという
ことにみなさんが動きかけて
突らせてほしいなと思ひます。
やはり今日のような機会を
通して連帯できるところでは
連帯しながら一歩前進してい
けるようにしていきたいと思います。

—会場から北村氏

いろんな活動とか事業とか
をなさっているみなさんです
が、何ごとにも天の時、地の
利、人の和というのが必要だ
と思うんですね。

渡辺さんのところも、地一
石子の渡辺さんがある程度築
き上げてきたガラスの組みや
げというゲームにのっている
言ってみれば天の時だと思

んですね。
美術館構想でも、そういう
時とか、状況とか、いろいろ
なものに左右されると思うん
です。

この運河講座を執行してき
た方々も、今この時期にお造
倉庫の再利用を柱にするよう
ということには、小樽に運河
という社会問題あればこそな
んなんです。

現実的に、かたや道路をひ
きたいという人がいて、かた
や残したいという人がいて、
その中で、俗悪な折衷案を事
を運ぼうとする行政が、あ
り、というふうにはよくはとら
えられない。

こういう時にあたって運河
講座に出てきていただい
てお話しをうかがっているわけ
ですが、お一人かお二人にそ
のへん的心境をおうかがいた
いと思うわけなんです。

—渡原氏

すごくおもしろい問題で、
返答に困ります。ただ小樽の
住民権をもって一人として
代表的なことは、ないかな
って気がするんです。

ぼくは小樽に住んでみて、
白の黒かつつけられる感じが
すごく強いんです。

どうでもええ人やないかと、
ぼくは小樽に住んでいて、小
樽が好きなんです。

なんとしたかと思ってる。
別に黒でも白でもええ人や
ないか、どっちでも。

それともう一つ、ぼく自身
が運河の横の倉庫に移るか
という、ぼく知らんんです。

なぜか金がないんです。リ
ズンな所にぼく行ってあげ
て、ぼくお金稼いでいると
ころどこやと思ひます？

ぼく小樽で稼ごまり、小樽
で個展やってはいないんです
けれど、ガラス・スタジオで
作品並べて売るよりも大阪な
り東京なりで個展やってる方
が売れるんです。

こういう状況の中で、ぼく
小樽で運河にかかわれるか。
ぼく今のところはまったく
できない。

だからその問題について意
見を求められたり、どうい
う動きをするか言われたり、
残念ながら、ぼく傍観する
つもりでしようもないんじゃない
かなって気がします。

ぼくはガラス・スタジオと
して30人ほどの人間食わして
い、なつかん。その方が先
です。

おから正直言っ、今日ここ
へ来てお話しして、やはり、
社に帰って風呂敷さんで、な
んか売りに行った方がええん
とちがうかなというくらい金
にはたいへんです。というこ
とでお答之にして下さい。

—落氏

ぼくも大した同じ意見です
けれど、埋めたてに聞かして
やはり運河を残した方がいい
と思ひます。

小樽自体をひとつの観光都
市にして、この街は産業は
起こさなければいいんじはな
いかなと思ひます。

自分の子孫の生活しやすい
ように、へんな公害出す企業
をもつてくるよりは、もしくは
へんな煙をはき出す企業を
もつてくるよりは観光都市に
なつてしまった方が自分の理
想をはなれたいものにならん
ではないかな。

それで一部分運河が活か
せることができればそれはい
いんじゃないか。

— 渡辺氏

ぼくは才一 回日ハポート・
フェスティバルを組織して実
行専員になりました。その
後才一 回ハ運河講座の実行専
員をやりました。

会場としてははっきりして
います。ぼくは運河を残して
小樽のまちづくりの基礎にし
ていきたいと思つて運動にか
かっています。

— 佐渡氏

実は20年くらい小樽を離れ
てたんです。正直言つてこ
ちらに来て運河をどう思ふか
と言われとも答へようがな
かつたんです。とにかく考
えてみたこともなかつたです。
ですから、さっきここで映画
を観て、突になつかしいなと
いう気がして、センチメンタ
ルなことしか言へないだけ
なんです。運河も風景をつくら

ていふ一部だという考へと、
そういう個人的な考へという
のはさぶくありません。

まあそれ以上のことは考
えていないです。さういふ立場
とよんで言われても、やはり
風景としてはいいなと思ひ
ます。

— 中山氏

さっき浅原さんが言われた
ように、白黒つけるという思
ひが非常に多いなと思ひて
います。

正直言つて残念だなと思
っています。ひまを限り残す方
向は残存していきなれと思
っています。また、今までの
作ったような映画でもさうな
んであるが、アピールがもつと
地元の都市に対してなかつた
んじゃないかなと思ひます。

もっと宣伝というのを
入れていけばいいんじゃない
かなと思ひます。

小樽に毎月1回くらい飲み
に行こうかな、という人も
限にはいるわけですから、
そういう暖りおこしをしてい
けばいいんじゃないかなと思
ひます。

— 佐々木氏

小樽を象徴するものは何か
と僕なんか考へると、たと
えば日銀があるとか、それ
以上に運河というものが一番
だという気がするんです。

つまり、それを埋め込んで
しまつと小樽ってイメージが

全くななくなつてしまふ。こ
れは名前がなくなつてしま
うような気がするわけだ。

だから、開発とか新陳代謝
というものは必要だから、時
代に即応したような意識も
あります。

小樽という街は海と山に
囲まれて、非常にコンパクト
になつていて、道路をつくら
なくても、山側か海側しか
ない。まん中に作るわけには
ない。

やはり海というところ
もそこそこしかない。もっと
お金があれば海の中に直接橋
をつくらせてやる。もしくは
小樽というものを大切に考
えていかならうとするのも
いいと思ひます。

だからレベルということ
考へてみると、さういふ
ところは話がちがうなと。保
存することと開発すること
とは小樽の場合がちがうレ
ベルの問題なんだという
認識を持たなければなら
ないと思ひます。

たとえば美術関係です
よね。最初ぼくが話し合
った時に、パイパスが通
つてもいいんじゃないか
という意見がありました。
ただいろいろ運動があ
つて残したいという人の
熱意がなみなみならぬ。

小樽は怒だけじゃだ
めです。ぼくたちも心情的
には倉庫を美術館にする
運動をする過程において
は、やはりあつては残して
おいてほしい。

さういふふうな心算でや
つていけるわけですよ。

第7回 総括討論会

昭和56年6月29日
小樽市労働会館

——司会

それでは只今より始めたいと思います。

顔なとみになつた方が殆んどなんですが、まず自己紹介から始めたいと思いますのでよろしく願います。

私は今回の運河講座実行委員の一人で、夢の街づくり実行委の平田と申します。

——峯山氏

小樽運河を守る会の峯山と申します。

——佐々木氏

この春から「ふいえすた小樽」という雑誌に参加させて頂いてます佐々木です。

——榎野氏

私、税理士の榎野といえます。9年前に室蘭から小樽にやって来たんです。

その時は僕の代さえ小樽がもってくればいいと考えてたんですが、息子が今度大学生になったんですね、で、私の後を継ぐと言ったものですから、これは私の代だけで小樽が終ったら困るなと思ひましてね。

私は保存には反対なんですが、賛成の方も意見もきいて立場は違つても、将来の小樽を良くするにはどうしたら良いか、ということを考えてみ

たいと思つて参加しました。

——石塚氏

札幌で教員をやっております、運河を守る会の一員として参加しております、石塚です。

——長南氏

今回初めて参加させて頂きました、大同倉庫に勤めております長南と申します。

——江川氏

南小樽で繊維の卸しの会社に勤めております江川です。

——中山氏

中山です、この前、映画を見て頂きましたが、運河だけは何とか残していきたい、出来るだけの協力はしていきたいと思つてます。

——伏島氏

札幌の伏島と申します。エセックというコンサルタント会社に勤務しております。参加させて頂きまして、色々な面で大変勉強になったと思つています。

——佐藤氏

佐藤と申します。家庭の主婦ですが、小樽川柳社の同人で編集委員としております。

昨年7月号で運河のことを少し書きましたし、前から関心がありましたので今回出

させて頂戴しました。

——北村氏

今回の記録を担当しております、運河を守る会の北村です。

——坂本氏

坂本和雄といいます。職業は造園業を営む父の手伝いをしております。

記録のほうを担当させて頂いております。

——渡辺氏

渡辺と申します。前回話しましたように小樽版画協会に所属しております。

——柳田氏

今は神戸に住んでるんですけど、都市計画とか建築の仕事をしております、運河を守る会の柳田です。

——五十歳氏

緑小学校に勤めております五十歳です。

二度の強行採決で、もう残念で残念でたまりません。

今度の講座では1回欠席しちゃったんですが、出て良かったと思っております。

——北村氏

私は運河を守る会の北村です。

——庄部氏

庄部と申します、どうぞよろしく。

——中島氏

旅行に来て、長期滞在しているんです、色々な方とめぐり会えて本当に良かったと思っております。

中島と申します。

——青藤氏

君の町づくり実行委員会とふいふい小樽をやっている青藤友美と申します。

——司会

それでは討論に入りたいと思いますが、今回の講座をふり返ってということで森下さんの方からお願ひしたいと思ひます。

——森下氏

まず最初に、今回の講座はどういう狙いで行なわれたかということですが、大きなテーマとしては小樽の町づくりを今後どうしていくのが良いか、中でも、どのように運河の再生を進めるか、その一つの具体的な課題ともいえる、石造倉庫の再利用に焦点をしばってみました。

では何故、石造倉庫の再利用にしばったか。

皆さんご承知と思ひますが先頃の市議会で公有水面埋め立ての採択が強行されたわけですが、その背景の一つとして、今年度から始まりました倉庫業近代化事業との関連があるのではないかと、ということがあったわけです。

小樽が経済的に低迷している、そこを脱却しようとして倉庫業近代化事業と道路建設とが連動して進んでいる。

低迷しているという状況の中で、やはり、経済至上の論理といいますが、そういうものが非常に働いて歴史的環境を危うくさせているのではな

いかと考えるわけです。

とするならば歴史的環境の保存を実現していくには、経済との調和が一つの大きな課題となってくるわけです。

そこを考えた時に、石造倉庫の再利用、商業的つまり経済的な調和を考えながら再利用していく、という事が具体的な現実的な課題であると考えたわけです。

というわけで、石造倉庫再利用に関して様々な角度からその可能性を探ってみよう、というのが今回の講座の狙いだったわけです。

ということで今迄6回を聞いてきたわけですが、討論のテーマとして今日は3つ用意してきました。

最初は石造倉庫の再利用についてです。

今迄の講座を聞いての感想でも結構ですし、色々なご意見を出して頂きたいと思ひます。

二番目としては、ご承知のように6月26日の市議会で強行採決されて、市段階での行政手続きは終わったわけですが、この状況の中で、運河保存を拠点とした小樽の町づくり運動を今後どのように展開していったらよいか、という事について討論して頂きたいと思ひます。

三番目としては、この小樽運河研究講座を今後どのような方向で行なっていったらよいか、という事です。

以上三点を実行委員会としては討論して頂きたいと思ひます。

——司会

討論に入るわけですが、その前に、後からいらした方に自己紹介をお願いします。

——青木氏

どうも遅くなりまして。土木部次長の青木でございます。

担当しております仕事に直接かかわりがあるものですから、参考にさせて頂きたいという事で参加させて頂いてます。

——森本氏

どうも今晚は。私、絵をかいている森本です。

この運河を守るという事に関わって、色々な事を考えさせられておりますし、何かとてそ人生の中の有意義な時を今、過しているような気がしています。

——司会

それでは討論に入ります。フリーな形でディスカッションしたいと思ひますので、ご意見のある方はどんどん出して下さい。

——北村氏

石造倉庫の再利用という問題を今回のテーマにされたのは多分、市として、実際の動向もそうであるし、あれは残るんだからと、何度か私どもに向っておっしゃっている、で、残るんだから再利用を、という事でテーマにされたと

思うんですけども、どうもここ最近の問題をずっとたどってみますと、実は石造倉庫は残らないんじゃないかと心配しているんです。

というのは、市側は、いずれ説得するとおっしゃりながらも、私有物には手はつけられないという考えが根本にあるんですね。

これでは、市の説得の効果には期待できそうもない、そんな気がするものですから、残るんだから再利用を、の一步前に、どうすれば残せるのかを考える必要があると思うんです。

——森下氏

市の計画に沿って道路建設が進めば石造倉庫だって残らない、というのは全くその通りだと思うんです。

ですから逆にね、石造倉庫の再利用こそ運河保存につながるかと僕は考えたわけです。

先程も申しましたが、倉庫業者はあの地区から撤退して勝納ふ頭へ集団移転しようとしているわけです。

あの地区に大規模な道路をひく事で起るであろう新しい土地利用に期待して、勝納へ移るはずみをつけようとしているわけです。

では、道路が出来る以前に経済的な条件を満たした再利用例、それを具体的に示すことが可能ならば、ひょっとすると道路建設の要請を顕明する事も出来るのではないかと、そ

う考えたわけです。

——五十嵐氏

あの26日の結果でね、一番残念なのは、私、教員なものですから、小樽の町の移り変わりや港のことなどは小学校の3年生で勉強するんです。

フィールドワークといっていますが、運河沿いをずーっと歩いて、で、運河の幅が40m、あそこに橋がついて、荷上げされて、といった話が子供達には一番良く分って勉強になるんですよ。

それが水面の幅が半分になり6車線の道路がついて、橋もいなくなっちゃったらどうやって子供達に教えていけるかな、と考えるとそこが残念で残念でしょうがないんです。

それと、才4回でしたでしょうがこの講座の、初めて聞いてびっくりしたんですが、

美術館とかガラス工芸とかレストランとかね、素晴らしいなあと思ったんですが、工業指定地区になっていて、良いなと思うものは全部ダメではないかと、そのあたり何かもっと分ったら面白いなと思いました。

——司会

えーと、石塚さん。

——石塚氏

いや、そういう、小樽の港湾地区の用途地域指定や、こういう活動が現状の中で許されるかという問題は、お隣りに市役所の方がいらっしゃる

ので、お伺いするのが筋だと思えますが。

——青木氏

それでは、私も専門の所管でないので一般的なことで、都市計画の中の要素としては、道路、公園、下水道、都市施設としてはこの3つ位ではないかと思うんですね。

その他に今の用途地域という指定をしているわけです。

つまり、工業地域とか住宅地域とか、商業とかです。

たとえば住宅地域にはガスタンクのような危険なものは建てられない、といった規制をしているわけです。

これは全市的な見地から小樽の町づくりの上で、どの地区はどう利用したら良いかという事で設定されているわけです。

運河地区は小樽倉庫のある辺は準工業地区で、小樽倉庫と大家倉庫との中間位から運河の北端までが工業地区に指定されています。

それと同時に臨港地区というアミもかかっている。

そうすると、今問題の石造倉庫の再利用にも色々規制がされるわけです。

で、色々伺っていますが、皆さんのお考えに合うような土地利用ということだと、商業地区とか近隣商業地区とかに指定を変更すれば良いわけです。

これは絶対的に変えられないものではない、という事は

いえるわけです。

——山口氏

僕らも色替へをしたらと提案をしてきたわけですが、市の環境整備構想ですね、あれを見ますと、特に寄寓寄りの方ですが、ショッピングゾーンとして設定されているわけでしょう。

当然、あの構想を実現されるためにも、商業地区への変更はされるお考えなわけですね。

——青木氏

いや、そういう事じゃないんです。

先程いきましたのは一般論として指定変更は不可能ではないということで、今、市が作っている環境整備計画の考え方は現況の枠内での環境整備という事なんです。

——森下氏

北浜にですね、新博物館を建設と、ありましたけれど、工業地域の中で出来るんですか。

——青木氏

たしかですね、可能だという考え方でしたね。

——森下氏

いや、規制対象に入ってるんじゃないですか。

——森本氏

あのほら、佐々木さんの、大家倉庫を美術館にっていう話、あれは引っかかるんですか。

——石塚氏

ええ、かかるんです。

ですから守る会としても、道路にすべきか環境を残すべきかという議論だけじゃなくて、あの地区をどう見直していくかということが重要な課題だと問題提起して来たわけです。

——山口氏
手続きは複雑ですか。

——青木氏
手続き上は別にね、小樽市で決めりゃいい事ですから。ただね、全市的な問題ですから相当に議論のある所だからね、そう単純に変更は出さないでしょうね。

——山口氏
今の倉庫業の方々は騰納へ58年をめぐるといふ現実があるわけでしょう。

当然あの地区は、空き屋になったり所有者が変っていったり、そういう転換期にあるわけですよ。

じゃあどういふ業種が進出するかという、小樽は三次産業が圧倒的なわけですよ。

そういう中小の商店が立地するにしても、市の環境整備構想が実現なったとしてもですね、工業地域という人の寄りにくいあみの中では立地は難しいという事は常識的に云えるわけでしょう。

外部の人間にとつての魅力ある、極端に云って言えば、観光資源として生かして貰えない、宝の持ち腐れだと思ふし、あの地区はそういう風に再開発していくべきじゃ

ないかと。
民間の先行投資なんかがあり得るようにですね、市の方でも用途地区の変更なんかを是非とも検討して頂きたいと僕ら思うんですよ。

——椎野氏
あの私ね、あの倉庫というのは市のものでもなければなんでもない、私有物なんですよ。

それを我々がなんぼ議論したってね、やっぱりちょっとねおかしな感じがあるんだよね。

私たち中央ライオンズで市の分庁舎に美術館作ったんですよ、でも5百万のお金を集めるのにたいした苦労したんですよ。たった5百万でね。

だから大家倉庫を買って美術館をなんていっても、買える筈ないんです。

唱えてさえいれば何とかやる、只で何でもやって貰える、そういう発想のような気がするんですよ。

市長を動かして国を動かすとか、それをやらない市長ならとり返るとかするんなら、話は別ですがね。

私は昭和20年から3年間この経専にいましたね、しばらくぶりで小樽に帰って来て、何も変わってないんですよ。

それは昔はなっかがしい、だけと変わっていないことが、反面嬉しいの反面淋しかったですよ。

小樽はね、何とこう、政治

の力が弱いような感じがするんですよ。

——石塚氏
花崎卓平さんが先5回で、地域を離れて、或いは他の地域から見た時に初めて地域の良さを再発見できる、というお話しをされたんですが、その後の先5回でしたか、地域での試み、で実践してる方やその他の小樽での動向を見ると全くそういう顔ぶれなんですよ。

何かそういう視点を持った人達が何かやりたい、という動きが今おきているというのが、ここ数年の間の小樽のすごく特徴的なことだと思うんですよ。

それが何かちょっと空回りしているといいますが、小樽で長く生活されている方々との間で、うまく結びついていない。

何かそういう所をうまく結びつけていく気運というのがないのだろうか、今回の講座を通じてその辺が非常に関心をひかれたところなんです。

——椎野氏
守る会では何かそういう働きかけはしてるんですか。

——峯山氏
小樽倉庫などには現地保存の要請をしてきています。

たしかに私有財産なんですよ、私たちが町並み保存という立場で考えていますことは、町並みはみんなのもの、という考え方が一つあるわけ

なんですよ。ね。
私有財産ではあっても、それが町並みを形成した時はみんなのもの、と捉へて、小樽倉庫さんなんかにもお話ししているんですよ。

もう永年働き抜いてきた倉庫なんですから、単に売って金にしようというのではなくて、もう一つ次元を高く、小樽全体に還元する、という考え方でね、

——椎野氏
いや会長さん、それは甘いんだなァ、甘いわ。

何かおねだりしてる感じですね、僕は好きじゃない。

——峯山氏
ですけどね、伝統的建造物群の指定を受けますと国や道からの補助金もあるわけですから、そういう事だてはあるのですから、ただおねだりというのではなくてね。

——柳田氏
基本的に日本は資本主義の国ですから土地建物の私有は認められて財産権があるわけですけど、町というのは人々が協力しあって生活していく場なわけですよ。

そういう人と人との和というものが上手くいってる町が良い町になっていくんだし、その一つの表われが、個人が持っている建物の並びが町並みという形で捉えられるのではないかと思うわけです。

ところが小樽は経済的に落ちて、そんな事がきつとる

どころじゃない、自分が食って行くのが第一だ。

まあそういうところで、和というものが実に生まれずらいペースになってる。

行政が強い指導力で引っ張って行く必要があるわけですが、これが全然できていないわけですね。

こうした中で僕らが云って居る事は、まさに高望みなわけですけども、正しい事だと思われ、言い続けていくしかないんじゃないかと思うわけです。

まともな事を云ったのにそれが上手く実を結ばない。

そこに様々な問題点があるわけで、市の方にも参加して頂いて勉強し続けていく必要がある、と僕は考えているわけです。

——中山氏

最近ですね、道あたりでは苫東開発にもう少し力を重点的に入れるべきではないかといわれてましてね、まだまだ石狩湾新港が本格的に始動するの難しい、というような意見も出てきてるわけです。

ですから、北海道の日本海側の港としての小樽港の重要性というのは、地元の人、もっと見直していいと思うんです。

それと、都市の再開発事業というのは、課税されないと非常に特典が与えられた形でできてるわけです。

ですからね、線引きの問題

をもう少し考える必要があるという気がしてならないんですね。

日本の中で、北海道じゃないですが、実際に工業地域から商業地域への変更をした所も私知っていますね。

研究していく必要は十分にあると思いますね。

——司会

今後の事を考える材料として、行政や議会の現在の状況を簡単に説明して頂きたいと思います。

——峯山氏

ご報告いたします。

5月28日、縦覧が終った時点で保存の意見書を市内から1600通、市外から400余通、合計2091通を提出してごぞい

ました。市長さんはその2091通の意見書を9種類に分けて、それらは運河地区整備構想に盛り込んであるんだから、とあっさり片づけていらっしゃいました。

6月26日の経済委員会になりまして、社会党からは環境アセスメントに関して7項目の質問がありましたが、私たちにしてみれば、どうも納得のいかない返答でしかありませんでした。

共産党からは平面図についての不備な点がある出されました。

測量年月日がおかしい。既測をしていないふしがある。所有権などには戸籍簿直しが

いがある。許容誤差30cmなのに2m60cmもの誤差が放置されている。

私たち傍聴しておりましたそんな事そんなことだったのかと非常に驚ろきを持ちました。

全く納得のいかないままに数の論理で押し切られてしまいました。

公有水面埋め立ての行政手続きは小樽市段階ではすべて終わったわけで、おそらくすぐに運輸省へ提出されることでしょう。

しかし、縦覧書類の中にも納得のいかない点のごぞいしましたし、市議会で提起された数々の疑問点、2091通の市民からの意見書の処理の仕方にしては納得のいかないことばかり、というのが実感でござ

います。運河保存を市民に更にアピールしていかねばならないと考えておりますが、これから先、どう運動に取り組んでいくかという事を今、守る会の中で話し合っているところなんです。

そういう状況なんです、この講座にいらした方々がどう捉えてらっしゃるか、ご意見を伺いたいと思いますし、出来るならば、是非、戦力として加わって頂ければ大変私は有難いと思います。

——司会

できれば守る会以外の方に

ご発言を頂ければと思います。

——長南氏

倉庫業ってもですね、昔の中小の業者20社くらいが倉庫まわって作ったのがうちの大同倉庫ですからね、後の者は建物を借りて大同の看板で仕事をしてるってうだけなんですよ。

まあ、会社の云い訳するわけではないんですが、結局我々は借りてるだけだから、自分の建物だったら雪下しもするけど、3月だからもう溶けるだろうっていう風な...

倉庫自体でいえば、昔の船から荷物がついでいく奴ですからね、やはりリフトの回転とか機械荷役でいけばちょっと無理ですよ。

大型トラックが中に乗り入れて荷捌きできる倉庫に変っていくんじゃないですかやっ

ぱり。運河大事だ、倉庫大事だ、っていても我々はそこで生活していかねば、会社がなければどうしてもいかないわけです。石造倉庫とか愛着持つのはいいけれど、やはり生活基盤となれば違ふんじゃないかと思えますね。

小樽へ来て大学へ入って、9年になりますけど、ちよくちよく手宮から運河沿いの倉庫を歩いたりしたんですが、ついに2、3年前から臨港線に接するようになって、運河沿いの、けっこう車がひんぱ

人に来るんですね、近道だと思つて。信号ないですから。前でしたら写生の人が写す真の人を写すてましたからね、臨港線できると、5、6年前でしたら、あの辺歩いておね良い場所でしたけれどおね。

もう駐車場みたいにかわりみんなできてるし、実際に臨港線できて車は多いし、やはりちょっと観光する人でも何でもくじけるんじゃないですかね、のんびり歩くとここで良いところであつてね、あそこ。

——青木氏
ちょっと要請してみた事をお話していきたいんです。

この運動ね、行政側の中で突つたと思うんですね。

守る会の運動は町づくりの運動だと、それはその通りですし結構だと思つてます。

ただ、小樽の町づくり運動として臨港線の建設促進というのが一方にあるわけです。

従つてね、行政としては道路の建設と、運河や倉庫の保全と、まあ一所懸命にやつてゐるわけですね。

ですからね、道路はダメというんじゃないで、今、市がたてている、道路建設と運河地区環境整備計画とをうまく調和させる、という観点から行政側と手を握り合う、一口で云えば条件闘争に切り換えてね、守る会も夢街も行政と手を握り合つて、新しい町づくりを進めていく。これは本

当は、しがるべき事じゃないかと思つてゐるんですが。

——中山氏

みなさん一杆言いたいだらうと思つてますけど、私から。

私たちの考えはね、本当に良い小樽にしたい、ところが行政は、道路も造れば運河を残すという形で、結局私たちにしてみれば運河が残つたとは全然考えられない形なんですおね。

道路はダメ、とは言つてない、代案も提示してきてるわけです。

行政は、両方を勘案したとおっしゃるが、私たちに納得がいかないままにここ迄きてしまつたんですおね。

もっと私たちの意図する所を汲んで頂ければ良いんですがね。

——山口氏

僕もね運河については青木さんの言う事をう呑みにはできないわけです。

何故、道路があるかについても、僕らを説得して頂だける論理の展開はなかつたんです実際の話。

ただ、環境整備構想というのは前にはなかつたわけですね。

この運動があつて、行政と色々議論を重ねてきた中で、小樽の歴史的町並みというのを、双方で評価した、そういう意味で、一つの僕らの意見を汲み取つて頂いた、といふ事と思つてます。

たとえば色内通りにしても、倉庫群にしても、小樽市を僕らも残したいとお互いに云つとるわけですから、そういう部分では僕たちも行政と一体となつて、機軸を合つて、上野行政に官民一体で陳情するとかできると思つてます。

それおね、ただ議論するだけじゃなくて、たとえば市長さんから百円ポケットマネーを出して貰つて、部長さんなら20円とか、で僕らも100円とか出し合つて基金を作つて、オスセクターを作つて専業化していく。

こういう事は充分にできるんだと思つてますね。

そういう事なら僕らはやぶさかでないし、なんぼでも協力させて頂きたいと思つてます。

——植野氏

守る会の見解なんですか。

——山口氏

会の中では結論というわけではないですがね、これは、やっぱり行政と民間が一体となつて、全国に、上部の行政に働きかけていかなければと思つてます。

——植野氏

ちょっと遅いのね。

——山口氏

それは僕もそう思います。

ただね、僕らから云えばですね、歴史的町並みの価値つていうものを僕らが10くらい認識してるとすれば、市側はもう少ししかしてない。

観光予算ひとつとつてもですね、微々たるものですよ。そういう風に対応は遅れとるんです、非常に。

ただね、これは市にケツつけとるわけじゃないですよ、僕らは今迄全然してこなかつた事をし始めた、という事を評価してゐるんです。

それにですね、こういう事は単に行政にやれ、やれつて云つても駄目だと思つてますよ。

やっぱり、住民の中からやりたいという声が出さないとこなきやいかんわけです。

——青木氏

さっきの発言と関連するんですが、どうでしょうね、市の立てた「小樽運河とその周辺地区環境整備計画」を今後のこの講座でテーマにとり上げるのは。

道路と環境の整備は両立しないとおっしゃるけど、そうではなくて、調和させる方策を探つてみるという道があると思つてますよ。

それに実施設計はこれからの問題ですから、具体的に、街路樹をどうするか、街路灯は、プロムナードのフロアは何を使うか、そういう事はこれからの問題なわけです。

道路と環境を調和させる道を探る、そういう観点から市の環境整備計画を議論して、研究してみたら。

——中山氏

よく検討させて頂きたい

と思います。

——青木氏

その時にはね、先程から議論になってる、倉庫の再利用の問題、用途地域の問題、こういう事だよね、市の担当の専門家を呼んできて議論をする。

これは僕は価値があると思うんですよ。

——峯山氏

いや、まだね、道路が通るとは思っていないものですかね。

——青木氏

そんなね。たとえばね、今度の議会で問題になった準備の問題ね、末端の問題ですよ僕らに云わせりゃ。

目的達成のためには手段を選ばずっていうんであれば、それも結構ですよ。

——山口氏

いや、僕らはそんな事言ってないですよ。

——植野氏

ちょっと待って下さいね。観光が来ないっていうけど一番駅目なのは道路の整備が悪いわけですよ。

町並みが変わるっていうのがありますけどね、まず車の通す道を造らなきゃなんないというのが根本的な問題だと思っんですよ。

——柳田氏

その観光と交通の問題、大事だと思っんですよ。

観光課の人と話してみると小瀬の文学館、すごく良い所

にあるんだけど駐車場がないから駅目だと云っんですね。

修学旅行とか何かでバスで来るでしょう、文学館を見せたくてもバスを停める場所がないから駅目だ、もうどうしようもないんだと云っんですね。

しかし基本的に車社会に対応してこうという考え方は行政も考え直さなきゃいかんと思っんですよ。

逆にそういうのを武器にしていかなければ。

何れにしても、街を美しくするにはとが、魅力的にしていくにはとかいう事は始まったばかりかなと思っんですよ。

だから、そういう風な議論される場が持てる、という事が町づくりにとって大事だと思っんです。

ですから先程の青木さんの提案も大変すばらしいと思っんです。

それと、よくある行政の説明会というのじゃなく、行政の元から研究講座の中に入ってこられるという事ですから大変良いご提案だ、と思っんです。

——司会

時間は過ぎたんですが、まだ喋ってない方で是非という声がありましたら。

——佐藤氏

よろしいですか、私は本当に初めてこの講座に参加させて頂いて、7回とも休まずに出ましたんです。

あの、私、転勤族で、小瀬に8年住んでいますが、これだけこういう事で運河保存の方々が一所懸命やってるって、正直な所、初めて分ったんです。

運河を守る会のPR不足と云ったら諍弊があるかも分りませんが。

それで、私の感じた所では小瀬に生まれて育った方が余りに無関心じゃないかな、と思っんです。

むしろ転勤族とか、一度離れた方がすごく一所懸命にやってると思っんです。

だから、もう少し、一般の市民にどうやって浸透させるか、という事を考えなければいけないのでは、と思っました。

——北村氏

主に、今後の研究講座のあり方、について発言したいんですが、今日の話では、青木次長さんがお見えのせいもあるでしょうけれど、運動者が運動に基いて発言する、そういう傾向がちょっと強すぎると思っんです。

研究講座っていうものを開く時には、もっと講座に、先入観を排して、いったい真理はどこにあるか、を目標すべきだと思っんです。

つまり、運河を残す事が本当に良い事なのか、そこを議論してこそ講座なのだと思っんです。

倉庫は私有財産であるから

ここで議論するのはおかしいというお話がありましたけど、現行の法制の中でも、私有財産より重要なものとして公共の福祉の上位性も定められているわけですよ。

市民全体の善、につながる場合には私権を制限する事も認められているわけですよ。

ではいったい、運河というものがそこにあてはまるものなのか、どうなのか、そこを議論すべきと思っるわけですよ。

その意味では今回の講座は全体を通して技術的な問題に終始してしまっったという気がするんですよ。

佐々木さんでしたでしょうか、大家倉庫を美術館にという夢のある大変良いお話でしたが、ご自身が言っておられた通り、それは、美術館が欲しいという市民の意思がなければ話にならないわけですよ。

大家倉庫をどうしようか、じゃあ美術館にしよう、というのをおかしい。

美術館が欲しい、じゃあどこに造ろうか、でなければ本物ではないと思っんです。

一般市民にアプローチするためにも、再利用の技法を云々云々ではなく、まず、運河や倉庫を残すことにどんな価値があるのか、を探究すべきだと思っるわけですよ。

先程の青木さんのご提案、非常に良い事だと思っるわけですよ。

市は半分埋めても運河だと

いい、僕は半分埋めたら運河でなくなるという。

運動ならば、そこで声を大きくするとがすればいいのかわかりませんが、講座では、一体この差はどういう事なのか、そこを極めよう、という風に取り組みべきではないかと思えます。

——司会

今日のまとめという事にはならないんですが、全国的にみても、歴史的環境の保全を軸とした町づくり運動というのは最近の10年、そういう新しい、奇とぐりの状態だと思えます。

小樽もまさにそういう所にあるわけですし、積み重ねていく事が一番大切なんだと思うわけです。

で、まだまだ知り得ていない部分が多いし、やっぱりこうした町づくりを考へていくためには知識とか、情報を知らなくては行けない。

そういう勉強の場、情報を交換できる場として、この研究講座を続けていきたいと思えますし、出来るだけ多くの市民の皆さんに参加して頂いて、一人一人が、具体的な課題を一つ一つ明らかにして、こう積み重ねていく事、それが大切なんじゃないかという事で、まとめにかえさせて頂きたいと思えます。

最後に岸山代表から一言。

——岸山氏

今日は大変長時間にわたっ

◎ 今回の講座の位置づけ

今回の講座は、「どのように小樽運河の再生をすすめるか」をテーマに、運河再生の柱の一つである石造倉庫の保全・再利用に焦点をしば、ておこなわれました。その背景には、オIに、石造倉庫をはじめとする、小樽における歴史的建造物保全の機運の高まりがあります。市民の側からはすでに、運河保存運動をうけて、市内に現存する歴史的建造物保全の声が上がっていました。その声を受けて、市行政でも最近ようやく保全対策を講ずることが検討されています。こうした機運を受けとめる開かれた場が必要です。

オ2に、保全の期待とはうらはらに、現実の動きとしては歴史的建造物の喪失が進んでいるという危機的な状況にあり、保全が現実的かつ緊急的な課題とな、てきていることがあります。昨年は寿原邸、青山邸が、今年に入、てからは運河沿いの石造倉庫2棟が相次いで姿を消し、さらには市立図書館も取り壊しが決定していたことは、現存する多くの歴史的建造物が同じ運命をたどるかもしれないことを示す警鐘として受けとめねばなりません。とくに、運河沿いの石造倉庫群は、今年度からスタートした倉庫業近代化事業に伴い、スクラップ化の動きが懸念されます。こうした緊急の課題にこたえる討論の場が必要です。

オろに、歴史的建造物の喪失の原因が、根本的には小樽の経済力の低下にあるという状況分析があります。もし、石造倉庫の保全・再利用——それも商業的な施設として再利用でき、低炭素経済への新しい刺激剤となれば、小樽における環境保全と経済の隘路を突破する糸口になる可能性があります。そ

れがいては、運河保存の実現への一つの道を聞いてくれるのではないかという期待が、今回のテーマには込められているのです。

● 長体的な目標と内容

このような位置づけをふまえて、今回の講座は、石造倉庫の保全・再利用の実践課題と、その課題解決の道をさぐることを目標としました。

実践課題として、次の3点を設定しました。

① 保全・再利用を誰(どこ)がやるか — 主体の可能性

保全・再利用を実現するためにあって、それを誰(どこ)がやるのかという問題は、最も基本的な課題です。公共の手でやるのか、民間の手でやるのか、あるいは両者が協力してやるのか、いろいろなケースが考えられますが、今回は、地元小樽で工芸、美術、喫茶、レストランなどの経済活動や文化活動を行い、活動の拠点を歴史的建造物に求めている若者たちに、その可能性をさぐってみました。

→オ6回「地域での試み—小樽を生きる場として—」

② 保全・再利用のために、どういう手だてが考えられるか — 事業化の方法

保全・再利用の主体があったとして、実現するためにはどういう事業がありうるか、またその事業をどのように進めていくかが次の重要な課題となります。公共事業の可能性を全国各地、諸外国の事例から、民間の手による事業の可能性を神戸・北野地区の事例から、公共、民間両者の事業の可能性を日本のトラスト運動として有名な知床の土地買い上げ運動の事例から、それぞれをさぐってみました。

→オ7回「町並み保存事業—事業化の手法をさぐる—」

オ1回「にぎわいの広場の創造—保存と経済の調和をめざして—」

オ2回「土地買い上げ運動の展開—知床の環境保護に学ぶ—」

③ 保全・再利用に際してどういう問題があるか — 問題点の整理とその解決策

一般に、歴史的建造物の保全・再利用には、建物を新築する場合とくらべて法制度上の制約の厳しさ、建築技術上の難しさ、多額の費用の必要など、多くの困難な問題があります。小樽の石造倉庫の現状に照らしながら、保全・再利用の様々な問題点の整理とその解決の方向を、道開拓の村へ移築された歴史的建造物の保存工場の事例と、地元小樽でおこなわれた再利用の実践例からさぐってみました。

→オ4回「歴史的建造物の保存・再生—制度的、技術的、経済的な課題をこえて—」

実践的な課題の検討だけでなく、環境問題全般にわたる理論的な検討もあわせておこないました。

→オ5回「風景の創造—社会と文化の再建をめざして—」

● 総括と今後の課題

歴史的建造物および歴史的町並みの保全・再生は、うるおいのあるゆたかな都市環境をつくる上で、全国共通の一つの重要な課題です。しかしながら、一部の地域をのぞいて、なかなか実現までに至っていないのが現状です。それほど困難な課題なのです。それは、この課題がまちづくりの中心的な役割を担うものとして注目をあびるようになってから、まだ20年ほどしかたっており、まだまだ研究、実践の蓄積が足りないからだと感じます。現在は、保全・再生をめぐる問題点を整理

し、それを解決するための課題をあきらかにし、実践人とも結びつけていく積み重ねの時期にあるといえます。

小樽の歴史的建造物、中でも石造倉庫の保全・再利用にテーマをしぼりこんだ今回の研究講座も、このような積み重ねの第一歩を踏み出したものとして考えたいと思います。長体的な目標に掲げた保全・再利用の主体の可能性、事業化の可能性などについて、即実践につながるような成果は得られなかったわけですが、今回の講座を契機として、市民一人一人がこの問題について主体的に考え、行動し、より発展させていくことが最も重要なことだと思えます。

今回のテーマに関する当面の課題として、市行政、石造倉庫所有者、保存団体、一般市民、研究者、専門家が一同に会し、それぞれの立場から保全・再利用上の問題点をあきらかにし、その解決の手だてについて議論を重ね、知恵を出しあうことがぜひとも必要だと思えます。関係する人々が意見をたたかわせないかぎり、発展、創造は望むべくもありません。そのような発展、創造の場として、この研究講座が機能することを切望してやみません。

将来的には、本講座を主催している私達自身が、石造倉庫の保全・再利用を含め、ひろく小樽のまちづくりに関するテーマについて学習、研究を積み重ね、その成果をもとに議論の場が設定できるまで力量を高めていくことを意志表示し、総括と今後の課題としたいと思います。

昭和56年7月 記

小樽運河研究講座実行委員会

※ 今回の記録の発刊が大體に遅れたことをお詫びします。

昭和56年7月